
彼方の地から

竜胆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼方の地から

【Nコード】

N9915X

【作者名】

竜胆

【あらすじ】

飲み会の帰り、気がいたら知らない世界。【主】【妖精】【我が子よ】って……。誰か、いやお母さん、どういふことか説明してよ。戸惑いつつも、生来面倒臭がりで無表情・鉄壁マイペースな主人公が行く異世界探訪記。

1 「お前、誰？」

（・・・行っただか？） そつと溜息をついて肩の力を抜くと、トスン・・・と背を木に寄りかからせた。見渡す視界いっぱい平原。その奥に遠く見える街並。色とりどりの屋根。

（綺麗だなあ。）と、普段であつたならのんびり眺めるところだが・・・。

（どうしてこうなった？） 今度はさっきよりも大きなため息をついて空を仰いだ。

昨夜は友人の誕生日で、仲間が集まって祝いという名目の飲み会をしていた。5人で盛り上がり、主役が潰れたのを機に解散。残った友人と二人で主役を本人のアパートに運んだ後、タクシーで家の近くの公園前まで乗って帰ってきた。その頃はもう朝だった。

「今度、彼氏に会ってね。あんたの目で確かめてほしいの。」

高校からの友人・・・優佳はそう言って笑っていた。

「ああ、いいよ。でも厳しいよ、覚悟して。」

大切な友人を預ける相手なんだから・・・と意味を含ませれば、優佳は花のように笑った。綺麗だと思った。普段から可愛いとは思っていたけど、今は綺麗だと。いい恋をしてるんだと思えた。そういう相手なんだな、君を大切にしてくれているんだね。嬉しかった。

二人で公園のベンチでそんな話をして缶コーヒーを飲んだ後、学校

へ登校する小学生の列が見え始めたころ別れたのだ。公園から左が優佳。右に下って行くのが自分。

手を振って歩き出し、公園を出て右に下って横断歩道を渡る人波に少し遅れ……。

（あれ？ それからどうしたんだっけ？）

考えても何も思い出せない。まるで真っ白で、そこだけ切り取られたように記憶が……。

そんなに酔っていただろうか？確かにかなり飲んではいたが、もともと酒には強いと自負があったし、どうせ送って帰らないといけなின்றろうな、と思っていたから知らず知らずのうちにセーブもしていたはずだ。

考え込んでいるとさわさわと風が吹き抜け、肩より少し伸びた髪が首筋を撫でてゆくのがくすぐったかった。虫でも入ったかと襟と髪の間の手を差し入れ、そのくすぐったい原因を掴みだした。

（……………）

見なかったことにしよう。

「あー、やっぱり酔ってたか？かなり。」

誰にいうでもなく、独り言。しかし……。

『ねえ、見えてますよね？』

（返すなよ。）

「夢、かな？これ。ってゆうか、大学始まつてる時間じゃ？」

腕時計は8時13分。優佳と別れた時間で止まっている。

「壊れたかな？あーあ・・爺様のお古だからなあ、これ。気に入ってたのに。」

ふるふると指を振って捕まえていたモノを軽く手放すと、さも残念そうに（いや本心から残念なんだけどね。気につてたのも本当だし。年代物の時計だからね。）時計を見てため息をついておいた。

『無視しないでいただきたいんですけど。 斎木 詠星様。』

ひた、と視線を合わせる。そのモノと。

「お前、誰？」

ビリビリと身体が、いや実体がないのに身体がというと語弊があるけど、身体ごとその場の空気が痺れる様な気がした。

真っ黒な真っ直ぐな瞳がひたとこちらに向けられ、反らすことは許されない威圧感が迫ってきた。もともとうねっていた髪がざわめくように逆立っているような気がして、浮いているのに貼り付けられている感じがして動けない。

「もう一度聞くよ。お前、誰？」

さすが、あの方が呼んだ人間だと思わずにはおられなかったくらいだ。

この威圧感、迫力…人間版『主』か、もしくは親子。．．．まあ親子というのは絶対にあり得ないのだけれど。あの方は唯一無二、絶対の存在であり、永遠の理。

『私は、ウイン。』

聞かれたから答えたのだが、にっこりと笑った顔からは相変わらずの威圧感。

「聞き方が悪かったか？…こういう場合、名前を聞いていると思うのかい君、いやウイン。」

存外に察しが悪いね、と言われた気がした。

しかも名を呼ばれた時、呪を掛けられたような束縛を感じた。まさか．．．名で縛れる？

『わ．．．つ我が主様のもとへとご案内します。』

（こ、こわいよう。）

詠星の目の前に浮かんだまま踵を返そうとした時、その透明に近い羽根を掴まれる。

『千切れるうゝ、お助け・・・』

思わず泣き声を上げると、呆れたようなため息が聞こえてぱっと放たれる。

「そんなに力入れてないよ。・・質問に答えてないだろう？」君は、誰？”。もちろん、名前は聞いてないよ。」

(・・・)

『生まれたばかりの木の精です。』

「妖精ってこと？」

『はい。まだお使いくらいしかできませんが。』

「では“主様”って？」

『私たちを統べていらっしゃる“主”でございます。王…と言った方が解りやすいでしょうか、人間の世界では。』

(王・・・ね。絶対権力者ってこと？)

外国ならまだしも自分が住んでいた地域には王様なんていなかった

かピンと来ないし、主従関係らしいが、庶民にはそれも感覚的に解らない。

【妖精】

【王】

（こりゃ、友人がやっていたファンタジーゲームの世界だな。・・・
てことは何か？本当に道端かなんかで寝てるのか？それとも、事故
ってあの世か？）

その時、声が聞こえた。

詠星・・・こちらへ。

きよろつと周囲を見回しても、何もないし誰もいない。ふと目の前
で羽ばたいているウインを見ると、さっきよりも元気がいい感じで
羽がばたついている。

「今のは？」

『主様です。道を開いて下さるようです。・・・愛されていらっしや
るですね。』

（愛されて・・・って・・・何だそりゃ。）

ため息をついた途端、扉が現れた。文字通り、“扉”だ。薄く透け
て見える様な感じで全体的に光背がさしてはいるが、それ以外は普
通の家にあるような扉、玄関の。

（入って来いってか？…怪しい。）

そう独りごちると、ウインの羽を捕まえて開けたばかりの扉から中へと放りこんだ。ウインならば眷属らしいから害はないだろうと踏んで、だ。その開けた扉の中、真っ白な空間に、何かがいた。人影ではない、でも嫌な感じはしない、何かが。

（・・・いってみようじゃないか。）

1 「お前、誰？」（後書き）

初めての投稿です。何卒生暖かく御覧ください。

2 「ううは、どい？」

廊下から人の気配が近づいてくる。とは言っても実際聞こえるわけではなく、気配だ。これはある人（人と言っているのかわからんが。）から貰った力だが、意識しさえすれば扉や壁などを問題とせず、自分が知りたいものを探れるらしい。人の心も、らしい。身の危険があつたらいけないので、とくれたものだが、もちろん探れないようにもできるらしい。でないとただの覗き魔だもんね。犯罪です。ちなみにさつきから“らしい”とやたらと付いているのは、初めて力を使っているからです。

窓の外に向けていた視線を扉へと当てた時、ノックもなしに扉が開いた。

人の顔を見るなりほっとしたかのように、また残念だともいうかのようにどっちとも取れるため息をついて、部屋の中へ入ってくる。

【とまれ。】

つぶやくと彼はくつと足が床に縫い付けられたかのように、歩いてきた動作のままその場に止まった。

「で？」

驚愕に固まる顔へ向けてそう声を掛けると、彼は緑色の瞳をこつちへ向ける。

「先ほどの言葉は？ 私は一体…。なぜ拘束が解けないのですか？」

なかなかいいお声ですね。空きつ腹に響きます。さつき下を向いてぶつぶつ言っていたのはその拘束を解くための呪文でも唱えてましたか。さすが魔術師です。ですが……。

不意に彼の薄緑色の髪が風にあおられたかのように靡く。風の出所は自分だ。

風にあおられた髪がふわふわと顔の横に降りてくる間、ずっと目の前の彼を見続けていた。印象的で人目を引くのは、黒い髪と同じ色の瞳。この世界にも黒い髪の間人はいるが瞳となるといないから。身長は低めだしその細い身体つきを考えると、まだ子供の領域だろうか。だが、それに反して表情は落ち着いている。見知らぬ人間に見知らぬところへ連れてこられたのに、だ。

「誰か来たね。」

「神官長です。」

答えた途端、拘束が解けてその場に座り込んだ。そして開けたままだった扉から神官長の……、

「ランバード神官長。」

彼の声に入ってきた人物は、びしりと自分の横で固まった。今だ座り込んだままで目の前の彼を見る。

「まさか神官長にまでっ…！」

「控えなさい。」

言いかけた言葉はその神官長に遮られた。

「愛し子様。お初に…いえ、私の代で御会いできるとは光栄に存じます。ウィル・セレン・ランバード、第326代中央神殿神官長でございます。」

「うん、最初に貴方に会うようにと言われたんだよ、…父に。」

“母の如き慈愛のセレン・道を示す雄々しきウィル” 受け止める覚悟はあるか？」

それはランバードのことかと神官長を見れば、ランバードは静かに彼の前3メル（1メル＝50センチくらい）ほど前に膝をついて腕を胸の前で交差させて彼を見上げている。ランバードは拘束されてはいないらしい。彼はそれまでの無表情が嘘のように、にっこりと魅了するような笑顔をして自分の胸の前に両手を合わせる。するとその手が眩しいほどに光を放ち一瞬目を閉じて開けると、彼の細い白い手が開かれその中、いや手の上に浮いているような形で赤いものが光を放っていた。

彼はそれを指で摘み、一歩二歩とランバードの近くへ寄ると赤いものをランバードの額に押しつけた。一瞬ランバードの身体が震えたようにざわめいたが、彼は気にした様子もなく依然そのままの姿勢で口を開いた。

「ガイアスの代弁者 パウロ・ウィル・セレン・ランバード」あなたに父の祝福と恐ろしき枷を。愛し子なる我の手によって授けよ

う。」

ズズッ・・・と音が聞こえ、その赤いものはランバードの額に埋まっていた。するとランバードの額に赤い文様が浮かび上がる。それは鳶が絡まるような文様で、そして彼が身体を屈め額に唇で触れると肌に溶け込むように消えていった。

「神殿守護第一部隊副隊長 エセル・ソード。」

彼の声が威圧感を持って自分の名を呼ぶと思わず立ち上がる。ランバードが振り返った。

「また後日お披露目はあるかと思うけど・・・彼は今この時より、名を“パウロ・ウィル・セレン・ランバード”と名乗ることになる。あなたには証人になってもらう。これ決定事項だから。拒否なし、質問なしでね。」

ああゝ疲れた。部屋のソファにすんとん、と座って目を閉じて天井へ顔を向ける。

「いかながなされた愛し子様。」

ランバードの声に目を開けると、彼とエセルが目の前に立っていた。エセルの方はいまだ釈然としない顔をしているが、ランバードの態度が恭しさを醸し出しているせいで自分には何も言えないらしい。

「お腹が空いたよ、パウロ。」

そういうとランバードは声を出して笑った。

私用だという部屋に通されて待っていると、エセルの指揮の下
食事が運ばれてきた。見目はいい。怪しそうな色も形もない。運ん
できたのはいずれも美形の三人。水色の髪を後ろで一つに束ねた少
し肌の黒い人はまだ若い男性。赤いうねり髪的美女はこれでもか、
と主張するバストの持ち主。そしてグレイの髪の・・・。

「クリス。」

名を呼ぶとびくつと身体が震え、ギギギツと音が聞こえるゼンマイ
仕掛けの人形のようにこちらを見る。その瞳は真っ青だった。エセ
ルが何事かと身構えるのが解ったが、そんなことには構わない。

「こつちへ、クリス。」

ダイニングのイスを少し後ろへ引き体を横に向けると、手招きをし
てクリスを呼ぶ。クリスは一度エセルの方を振り替えるようにして
見ていたが、もう一度名を呼ぶと怖々ながら自分の方へと歩いてき
た。どんだけ怖がられてんだ。シヨックだよ、少し。

目の前にやってきたクリスの手を掴む。小さな手だ。明らかに自分
より年下だろう。

「そのままでもいいと思ってる？それで自分を守れると？」

びくつとその小さな手が引かれようとするのを力を入れて離さない。
視線はその青い瞳からそらさない。

「なにをつ……。」

言つてこちらへ来るエセルを無視したまま、なおもクリスへと問いかける。どうせ邪魔はできない。

「護つてくれているものに悪いとは思わないか？君が受けた傷は大きいだろう。だが、それでも生きてこられたのは彼がいたからだろう？このままにしておくかと消えてしまふよ？」

“消える”と聞いてクリスがびっくりした顔をする。

「彼はそんなことも教えてなかったかい？よほど君が気に入ってるんだね。自分が消えてもいいと思うくらい。でもね、彼が生まれたのは意味がある。そしてクリス、君が生まれたのにもね。痛みを抱えるのは悪いことじゃない、でもその痛みに囚われて歩き出さないのはいけないことだよ。生きていれば辛いことは沢山ある。君よりきつい命を生きてる人だっている。何より君を彼が護っているのは意味があるからだ。それを無視して生きていくのは許さないよ。それくらいなら、彼を解放しなさい。消える前に父へ返せ。」

少しきつく言つてみると、抗議するように影が揺らいだ。自分以外の人間が啞然としてその影を見つめている。

それ以上は…

言つてくれるな、と？いつまで甘やかすつもりだ。それが逆にクリスの立ち直りを妨げているのが解らないか？それとも自分なしでは生きていけないようにする気かい？それを父が許すとも思っているのか？クリスが幼いというのならお前が導いてやらねばこの子

は一生このままだぞ。今はいい、お前がいるからね。でもお前が消えたらどうする気だ。

影は人型をとって項垂れるように膝をついて自分を見上げている。ワンコがいる、と悶えたが、今は自重。皆はそれを信じられないように見つめていた。

御子様。

「クリス。」

「っはい。」

急に名を呼ばれて不安そうにしていたクリスは、裏返った声で返事をした。それに少し笑った。

「お前が自分の道を歩き出さないというのなら、彼は自分が引き取る。エセル、あなたなら解るだろう？」

“何が”と説明しなくてもエセルは肯いた。

「消えかかっている。彼はもう…。」

エセルの言葉にクリスは慌てたようにいつも自分の傍にいたであろう彼を見た。精霊だから透けて見えるのではない。もうはつきりと姿を現わせないほどに彼は摩耗しているのだ。霊力が。

「そんな…僕の、せい、ですか？」

きゅっとクリスの手を握る。

「そうだ、とも言えるし、また彼自身のせいでもある。彼は君を可愛く思うが故に必要以上に甘やかした。君が歩きだすために背を押さなかった。これは彼の罪だ。精霊と加護持ちは表裏一体。歩き出さない君に加護はいらないだろう？ 神殿で十分守ってもらっているのだから。」

きついだろう言葉を投げかける。まだ幼い少年に将来を決めると、歩き出せと急かしているのは解っている。でも、自分は精霊側のヒトなのだ。彼が消えるのを見ているわけにはいかないのだ。

ウインが“主”と呼んだ、王に当たる人（精霊王？）は、眩しい光の中威厳を持って佇んで……

詠星！！ やつと会えたあ！

「……っなん……ぐえ。」

……佇んでいなかった。抱きついてきたよ、そりやもう思いっきり。危うく首が絞まって天国の扉をくぐるところでした。叩こうが蹴ろうが離れない身体をどうにかして引き剥がさないと死ぬと思った時、すさまじい力で自分の身体が後ろへ引かれ、精霊王も反対に引っ張られて、やっと離れた。温かく柔らかいものに包まれるように受け止められているのに気がついて周囲を見回すと、7人（7体

？）が立っていて、そのうちの緑の人に抱き留められていた。

邪魔をするな。私の詠星を返せ。

そんな駄々っ子みたいな言葉を言う時ですら、威厳のある声。しかし内容は全く、だった。

ガイアス。詠星は死にかけてたぞ。人間なんだ、手加減しろ。半分は。

水色の人がそう言って自分の頬に触れる。この人は冷たい。

そうだったの？ごめんね詠星！感激のあまり、つい…。

くねくねしながら謝られてもなあ…。

感激度は解らないでもないが、まずは説明、だろう？ガイアス。

そういったのは赤い人。

そうですね。座りましょうか？詠星。

促してくれたのは、空気椅子に座るように浮かんでいた茶色の人。

同じようにすると、まるでそこに椅子があるように座ることができた。高級な空気椅子はちゃんと身体を半分沈みこむように包んでくれた。

自分、緑の人、赤い人、茶色の人、水色の人、ガイアス、金色の人、黒い人、白い人。円陣を組むように丸くなって浮かんでいた。

詠星。何でも答えよう。聞くがいい。

黒い人の問いかけに、とりあえず、一番聞きたかった人ことを吐き出した。

「……どこですか？」

2 「ここは、どこ？」（後書き）

主人公・・・斎木さいぎ 詠星大学1年生で19歳です。えいせい

身長が低いだの、細いだのと言われておりましたが、172センチ。

この世界の人たちがでかいのです。

3 「説明を求める。」

この世界の名は、ガイアースヒル……

地球と違う次元の惑星なのだが、周回するとき見えなくても交わる時間があるという。ガイアースヒルのガイアス達からは地球は見えている。地球からは、ただそこに宇宙空間が広がっているだけだ。

ガイアースヒルは精霊と魔法が存在する世界。そして、人の他に動物や獣人や精霊、神も存在する世界。

（”獣人”って……。）

”神”ならば、信じるも信じないも、おそらく目の前にいるガイアスがそうなんだろうなあ、という感覚がありそしてそれは間違っていない。

（リアル・ネコミミとか？おお、同級のお宅秀才の奴が喜びそうな案件。自慢だ！自慢。帰ったら自慢しよう。）

ひそかに心の中でガッツポーズを掲げている詠星に気がつかないまま、説明は続く。その交わる時、不可抗力としてある現象が起こってしまうという。

我の力が流れ込んでしまうんだ。

「はい？」

聞き返すと見た方が早い、と緑の人が手を翳すと、その空間に何か

が現れた。詠星の世界で似たようなものというと、ブドウが。まだ実が生りきれてない、小さな房のまま。

見ててごらん。

そういうと緑の人はその房を両手の間の空間に留め置いたまま ぽらと言った。見ていると房がだんだん実を大きくし、色が濃くなつてゆく。

僕は何もしてないんだけど、今僕の力がこれに流れ込んでいるのが見える？

肯くと、

魔力とか精力というのはね、これと同じように高いところから低いところへと流れる性質がある。今この実を取り巻いているのは私という精霊の力、つまり精力だ。これはただの実、魔力などはもちろん持たない。それが近づくと私の力をとりこんで急激に熟してゆく。・・・同じことが詠星のいた地球とガイアースヒルが交わる時、起るんだ。

「つまり、地球へガイアスの力が流れ込む？地球には魔力のあるものなんて存在しないから、空っぽの状態なんだね？」

（溢れ出た力が器を求めるように、空っぽの地球に注がれる、ってのは解った。でもそれが自分に何の関係が？）

詠星の疑問が解っているように、ガイアスが話し出す。

君たちは気がついてないかもしれないが、地球にも神はいる。我

らはお互いを感知しているのだが、地球の神というものは人間に対して不可侵なのだ。力を貸すとか導くとかではなく、見守ることが仕事だ。それによって地球の行く末が間違った方へ行こうが正しい方へ行こうが、ただ見守るだけだ。・・・彼らは人間が好きだよ。愚かしくて賢くて弱い人間がね。でも力を貸すことはできない。それはあの世界の理なんだ。しかし、人間に直接力を貸すことはできないが地球の寿命が尽きるのを阻止することはできる。それで我の力をそれに使っているんだ。我の流れ込む力を地球の修復と維持に転換して地球を守っている。

「ちょ・・・ちょっと待って？地球の修復と維持？地球ってそんなに危ない状態？」

文明の発達具合と大きさからいつて限界だね。何しろあの星は小さすぎる。その上、人が多すぎる。

そう教えてくれたのは赤い人。近くに座っていると何となく熱いことから、この人は見たまんま火の精霊なのだろう。さっき実演してくれた緑の人は木か植物の精霊。

そうだったんだ・・・と思う。このままでは地球はとか、危機感を叫ぶ人たちは沢山いて、でも何となく毎日を過ごしてきた。エコだの清掃作業だのにはできる限り参加はしてきていたが、そもそも限界なんだ。信じている人がおそろくほとんどいないに等しいだろう地球の神様は、それでも地球を、自分たちを守ろうとしてくれていたんだね。今まで以上に感謝しないと。

でもな・・・。

「でも」？」

身じろぎをするようにして、黒い人が口を開く。嫌な予感に喉が渴く。

それでもガイアスの力は多すぎるんだ。この星を維持し我らを生み、世界を作った。そして地球とか他の星へも力を流していても、なお余っている。

（ってゆーか、ほかの星もですか…。どんだけ？）

ガイアスを思わず凝視すれば、彼は照れて真っ赤になっている。

ヤダ！ 褒めないでよ、照れるから！

褒めてねーし。気持ち悪いから赤くなるな。・・力が抜けるだろう。結論はな！ お前がガイアスの娘だってことだ。

（・・・は？）

ユファ

とがめるような赤と緑と水色の人の声が飛んだ。ガイアスを見ると何も言わず、ただ自分を見て微笑んでいる。そこにはさっきまでのおちやらかしたような雰囲気はなく、それが真実だと語っている。

「説明を求めます。」

敬語なのに何で上から目線・・・と皆は思ったが、ガイアスの娘だ、

威圧感は半端ない。それこそが証明だろうが本人には自覚がないようにだ。一番耐性のあるアルファがすいっと皆より詠星に寄る。

娘・・・というには少し違うのだが・・・。詠星、貴女はガイアスの力の塊だと言った方がいいだろう。貴女は人間の行う生殖活動、遺伝子を残すための活動から生み出されたのではなく、純粹に流れ出たガイアスの力の結晶によって生まれた存在だということだ。地球という星に貴方の家族というものがあり、貴女を慈しんではぐくんできたことは知っている。何より、私たちはそれをずっと見守ってきたからね。貴女が父と呼び母と呼び兄と慕う人間や、厳しいながらも貴方に稽古をつけていた貴女が爺様と呼んでいる人間たちと、貴女は違うのだ。それがどれだけの衝撃を貴女に与えるか、私たちは理解しているつもりだが、私たちは人間ではない。完全に理解はできない、できないが彼らと同じように貴方を愛し、慈しんでいることだけは貴女にも理解してもらいたい。特に人間的な言葉を使うのなら貴女の父親に当たるガイアスは。

詠星は黙っているガイアスを改めて見つめた。

光り輝くその姿がやけに眩しく感じられるのは、彼が色がいないからだ。他の精霊のように赤だの黒だのと色が無い。彼は（厳密に言えば彼なのかすら解らないが、見た目では男性型なので彼と呼ぶ。）肌も髪も瞳も・・・すべてが白かった。白い髪はその長身よりも長く、肌は内側から輝いている（いや比喻ではなく）。瞳は光彩ですら白い。おそらく普通ならば眩しくて直視できないはずだ。それを見ることのできるのは、彼が加減しているからなのか、それとも・・・。

それは君が我の霊力の結晶、娘だからだよ。

他の者は見ることをできないよ、と。ここにいる王たちは別だが、

それ以外の精霊や人間たちは目がやられてしまっし、何より密度が濃すぎて正気ではられない、と。

（娘・・・結晶・・・）

ピンと来ないというのが正直な感想なのだが、それでも嘘や偽りの言葉でないのは感覚で解る。それは幼いころから備わっていた感覚で、詠星はそれ故過敏な幼少時代を過ごした。嘘や偽りや誤魔化しを感じられるというのは、子供にとっては辛いことだ。そしてそれに気づいて欲しくないと思うその人の気持ちすら手に取るように解った。制御できない幼い頃は周囲を怖がり祖父の後ろに隠れてばかりの子供だった。祖父が一番嘘のない人物であつたからなのだが。

小学校へ上がつてすぐ、祖父には打ち明けた。自分はおかしいのか、と。祖父は聞いた後にこりと笑つて言ってくれた。『それはお前は神様の加護を多分にもらっているからだろう。』と。『うちは神社だ。神様はすぐそこにいる。その神様がお前に力をくれたのだろう。』と。そういう祖父の言葉に嘘はなかった。この人は本当に神様を信じているのだと感じられた。だから詠星も祖父を信じ神を信じられた。

その後、精神力を鍛えればその力を抑制できるだろう、という祖父によつて祖父の持つあらゆる武道を叩き込まれたのには正直音を上げたかったが。その修業という鍛錬の中で、常に自分の精神をニュートラルに保つていれば、周囲の雑音を遮断できることを学んだのだから悪いことばかりではなかった。ちよつとばかり女の子らしくない女の子が出来上がってしまったのには、両親が嘆いていたのは蛇足だ。

（両親。）

「自分はあの両親の子ではないということですか？」

そうであるとも言えるし、それではないとも言える。貴女は確かにあの人間たちの遺伝子を受け継いではいない。しかしあの女性の胎内にはいた。・・・それはガイアスの力が固まり貴女という存在ができ始めた時、地球の神たちが提案してきたことだ。彼らの世界では親のいない子は厳しい育ち方をする、と。だから人間の女性の中に貴方を宿らせてはどうか、とね。あの女性は自分ではそうと知らず子を宿らせていたが、その子は胎内ですでに命が尽きていた。その子を取り出し貴女を入れたのだ。あの女性に決めたのは貴女の家神、龍神の訴えがあったからだ。生まれた時周囲から浮かないようにとガイアスの力を変化させて貴女の地域の人間のように髪を黒く瞳も黒く。その後は龍神があなたを守ってきていた。しかし、限界があつたのだ。

アルファの言葉を受け継ぐようにして、茶色の人が出た。

人の身にはガイアスの力は大きすぎたんだ。

いきなり生命の危機宣言ですか？

このままではお前が消えてなくなると判断した。

待ったなし、でしたか…。

それで一か八かでこちらへ転送した。成功してよかったよ。

・・・殴ってもいいですか？

3 「説明を求める。」（後書き）

人外でした。

4 「デザートはまだですか？」

危ないだろう！

「つい。すみません。」

伸ばしきった脚を元のように胡坐に戻して空気椅子に座りなおすと、若干離れて茶色の人も座った。反射的に蹴り上げたのだが、届かなかった。というか測ったようにぎりぎりのラインまで下がられた。

力というのは形があるものではない。が、詠星は人としての型が定まっている。いわゆる”個体”だろう？モノのやり取りなどしたことはないからな。でもそのままにして詠星が消滅するのだけは避けたかった。地球にいて消滅するのであれば、こちらへ連れて来るしかなかったんだ。

龍神さまが構築した詠星としての人間の器には、ガイアスの力は大きすぎた。溢れる力に詠星の身体が飲み込まれ、人としての詠星は消滅してしまう、と龍神さまが泣きついたのだという。人としての器は外見の大きさのことではないから、身長が伸びようが体重が増えようが変りはしない。

ガイアスは最後まで反対した。“もし無事に来られなかったら？” “人間として生まれたのだから人間として死んだ方が幸せではないか？”とね。しかし、お前は人間として死ぬのではなく、消滅するのだ。影も形も欠片も残らない。それは幸せか？人間として死んだといえるのか？我らは何度も話し合った。そして実行したのだ。

詠星を此方へ呼ぶ。貴女を壊して再構築することをね。

・・・何かあったな、そういうの。

（仮面ライダーだっけ？改造人間って。・・・いやデビルマンか？）

兄貴のフィギアコレクションをもっと勉強しておけば良かったな。

「僕は…何をすればいいのか、解らない。」

クリスが弱弱しい声でそう言ってぼろぼろと涙を零し始める。その頬を白い指で拭いながら、彼は厳しい表情を崩した。

「生きてゆけばいいんだよ。精いっぱい自分の足で前を向いて歩いてゆくんだ。誘惑に負けず、ズルイ近道をせず……。自分の意思で選びとって真っ直ぐに歩いて行くことが君と彼の力になる。留まったままでは君の生きる力が減ってゆく。そうなれば彼は消えてゆく。そういうことだ。騎士になるのもいいし、神官になるのもいい。普通に結婚して家族のために生きてゆくでもいい。君は何にでもなれるしどう生きるのも君の自由だ。ただ責任を持つことだ。君自身と、彼に、ね。いいんだよ、手放しても。こっちの世界に帰ったからといって彼は消えはしないから。」

そう言うとクリスはぶんぶんと頭を横に振った。嫌だ、と。離れたくない、と。

「どうすればいいのか、解らないけど…。僕ちゃんとする。逃げないようにする。それじゃダメ、ですか？」

「・・・いいよ、それで。どんな困難があっても逃げちゃだめだよ？ 苦しくても辛くても、生きていれば当たり前だ。君を守って死んでいった家族には味わえない感情なんだから、むしろ有難いと思いなさい。そして君が生きることで彼らもまた生きることになる。見えない君に教えてあげよう。君のご両親はここにいるよ。」

言った途端、弾かれたように周囲を見回すクリス、私はその場限りの…と言わんばかりに、彼を睨みつけた。彼は相変わらずの無表情で解っているよ、というような顔をして私を見ながらクリスに触れているのとは逆の手で空中を一撫でした。すると・・・

「パパ！ママ！」

クリスの左右に女性と男性の影が浮かんた。それは半透明で頼りなかったが、確かにクリスとよく似た面差しをしている。クリスは二人に手を伸ばして、その二人もまた同じようにしたが触れることはできなかった。

「ごめんね、万能ではないんだ。ただ君に彼らが伝えたいことがあるらしいから。自分に触れてもらん？ 怖いかな？」

ううん、という感じで首を横に振って、クリスは彼の手に触れる。と、私たちには聞こえないのだが女性の影が口を開いて何かを話しているのが解った。そして男性が次に話し出し、片手を彼に差し出した。彼は繋いでない方の手でその影に重なるように手を差し出して、ぎゅっと握りしめる。次に彼が掌を開けると、シャラツと軽い

金属の音がして細い鎖が零れ落ちる。

「これ、パパの…。」

父親のネックレスらしい。確かに何もなかったのに。彼はそれを広げてクリスの首に架けた。

二人に返事をするクリスの言葉だけしか聞こえなかったが、不意に彼らが薄くなり始め、クリスの顔が歪んで涙が零れ始める。そしてゆっくりと微笑んで彼らは消えた。クリスは彼を見上げ、彼と目が合うとそのまま彼の腹部に顔を埋めるようにして泣いていた。

「愛し子様……。」

「泣いてもいいが悲しんではいけない。彼らは消えたんじゃないからね。……彼らは転生の輪に入ったんだ。やがて生まれ変わるよ。それが何時かは解らないが……。転生の輪に入るには厳しい審査がある。ご両親は心の綺麗な人たちだったんだね。大丈夫だよ、彼らはいま父の元にいる。魂は浄化の作業に入る。浄化され無垢な魂となってやがてこの世に生れ出る。 リイン。」

はい、御子様。

お前の霊力を高めよう。彼に与えて減ってしまった分をね。でなければ消えてしまうだろ？受け取るかい？

よろしいのですか？私などに……。

お前も等しくガイアスの子だろう？泣くよ、あの方は。お前が消えてもね。

精霊と何かを話していた彼は、精霊の額へ手をつけて何事か唱えた。すると、今にも消えそうな薄さだった精霊が輝きを増し、濃く生命力溢れる様相へ変化した。それによって精霊の顔立ちがはっきりと見え、その瞳が緑色なことが解った。

（馬鹿な・・・！）

属性は瞳に顕れる。精霊と加護つきの属性は同じはず。クリスは青だ、水属性のはず。

「クリス、大丈夫だね？」

それが何を聞いているのかクリスには解っているらしく、しっかりと肯いたのを見て彼はパチンと指を鳴らした。途端クリスを包んでいた透明な何かが弾けたかのように、パリンという微かな音がしてクリスの身体が一回りほど大きくなった。彼の腹部の辺りだった頭が胸辺りにまで上がってくる。

「ど・・・いう・・・。」

赤毛のメアリーが声を零した。

「彼がクリスを守っていたのさ。年齢と属性をごまかすためにクリス自体に魔法を掛けてね。そのせいで普通以上に霊力を消耗していたんだ。クリスの属性は緑。よって瞳は・・・。」

鮮やかなグリーンだった。透き通るほどに輝かしい色で、クリスの力の強さが解る。そして6つだと言っていた年齢も、9つだった。

「3年前の北部の惨劇を覚えていますか？」

ランバードの言葉に肯いた。その頃エセルはまだ神殿の部隊ではなく、王宮にいた。そこで話を聞いて行かせてくれるよう再三進言をし、やっと王宮が腰を上げた時には北部のその村は全滅していた。

隣国の傭兵がやったことだと発表があつたが、実際には傭兵ではなく正規軍がやったことだ。隣国は深刻な食糧危機で『テスの加護を失った』と周囲の国からは言われていた。畑はやせ衰え何を植えても枯れるばかり。物価は上昇し、王宮内の食糧さえ底をつき始めて、やっと周囲の国に助けを求めたのだが、それまでのその国の王族の横柄さや貴族たちの態度の悪さから積極的に援助しようという姿勢に出る国は少なかった。が、王族や貴族はそうでも国民には罪はない、やがて周辺諸国は国民にのみ援助を始めた。これにより王族と貴族の権威は失墜、それ自体が潰れてしまったのだが、仕えていた正規軍は行き場がなくなり傭兵化していった。そして村や町を襲いだした。北部の惨劇はそんな中起こった事件の一つだった。目的は食料の確保と亡命、そしてテスの加護を受けた者の排除。

「全滅だと言われた村人の中で、ただ一人生き残ったのがクリスでした。彼は彼の精霊に守られて、隣の町にある神殿に保護されました。あそこの神官長は同期でね、私の元へとクリスは送られてきて見守っていたのです。再び襲われることを恐れて心を閉ざした彼に、私は生き残りがいると報告はしなかった。」

ランバードはそう言ってテーブルのカップからお茶を飲んだ。

「リンドルがテスの加護を失った原因は知っているか？」

テーブルの上にあった皿は全て空になっている。

（どこに入ってたんだ？）

相変わらず細い彼の腰回りについて目を走らせながら首を横に振った。

「テスが子供好きだと知っているか？加護を失ったその日、テスの神殿にはひと組の男女がいたんだ。テスの加護を受けるべく生まれた緑の瞳の赤子を連れた夫婦がね。夫の名はアリー、妻の名はコレル。あの国の第二皇子とその妃だね。新たに生まれたその子に、テスが加護を授けて精霊をつけようとしていたその時、目の前で二人と赤子は殺された。神殿が血で汚され、土足で踏み荒らされ、そして赤子は両目を刳り抜かれた。それを指示したのはカイロス。自分の弟に加護つきが生まれて、自分の地位を失うことを恐れた故の愚かな行為だった。」

テスは怒ったよ、と彼は言う。緑の王であるテスは植物の王でもある。リンドルの食糧危機はテスの加護を失った故という話は本当なんだよ、と。

「加護つきはそうは多くない。だからこそ王たちはその存在を慈しむ。クリスについた彼はもちろん王の怒りの原因を知っていたから、クリスを、この国を守るためにも逃げたのさ。クリスの属性を変え、人の多い町をあえて選んで逃げた。“木を隠すには森の中、人を隠すには…”ってね。もしクリスが死んでいたら、次はこの国だったんだよ？」

知ってた？と彼はふつと笑った。あまり表情を変えない彼のそんな変化にドキツとする。

「な・・・ぜ？」

「助けに行くのを渋ったろう？パウロが何度も進言したし、君もだね。でも北部の警備隊に指示を出すばかりで行くのを渋った。理由を知らないとも思っているのか？愚かだね人間は。都合がいい時ばかり精霊に願いを聞いてもらいたがり、都合が悪い時は気がつかなかった振りをする。・・・自覚することだよ、君たちは常に精霊に囲まれて生きている。この世界は人間が中心なのではない。君たちは”生かされている”ということに。」

だからアルファとユファに嫌われるんだよ、と笑った。夜の精霊と昼の精霊の名だ。

「あーところでパウロ。すつごく悪いんだけどね。」

表情は変わらないものの、気まずそうな声で彼は視線をエセルからランドールへと向けた。> p b r .

「何でしょうか、愛し子様。」

ランドールはニコニコ微笑んで彼を見る。それで安心したかのように彼は言ったのだ。

「デザートは、まだかな？」

（だからどこに入ってたんだ。）

4 「デザートはまだですか？」（後書き）

白の精霊〓 昼の監視者〓 ユファ
黒の精霊〓 夜の監視者〓 アルファ
緑の精霊〓 植物の監視者〓 テス
・・・名前が大変です。忘れそう。

5 「タマでもポチでも。」

「愛し子様。」

それは、つい2日前突然に顕れた彼への呼び名だ。

黒い髪に黒い瞳。すらりとした肢体に中性的な面差し。

「何？ メアリー。」

見上げると木の上で枝に寝そべるようにして、ぶらんと片足を垂らしている彼を見つけた。

「使者が来ております。」

そう言くと、ふーんと言いながら動く様子がない。もう一度「愛し子様。」と呼びかけると、“面倒だなあ”と言わんばかりに上体を起こし枝から飛び降りてきた。

目の前に立たれると、そう身長は変わらないのに自然圧倒されるような感じがして2歩下がる。

「メアリー。」

ずっと彼の手が伸びてメアリーの髪に触れると、何かを掴んで目の前で開かれた。乗っていたのは、この季節珍しくないテントという虫。髪についていたらしい。

「きれいな髪だね。・・・髪を切るのはよした方がいい。女性の髪には魔力が宿ってるよ。」

そう言つて彼は神殿の方へと歩いて行った。

けしてやたらと威圧的なわけではないが何となく人目を引き、そして近寄りがたい雰囲気が出ている。彼が人を厭っているわけではないのは神官長との関わり具合で解るが、親しく声を掛け合うという感じは持てない。

『愛し子様だよ。』

エセル様に呼ばれて神官長が神殿警備隊の建物へ入った後、一緒に連れていらつしゃった時におつしゃった言葉。

“誰の“愛し子様であるのか、と聞けなかった。その醸し出す雰囲気は常人と違っていたから。神官長自らが先導して気を遣いつつ階段を登る姿を見れば、察して余りある。

最初はまだ子供かと思ったのだが、どうやらそうではないと解ったのは食事を運んだ時だった。落ち着いた物腰とまるで年を経たような瞳の深さ。クリスを導いた時の叱責のきつさと、その後の慈愛。見惚れるほどだった。

「・・・ああ愛し子様。一生ついて行きますわ。」

「愛し子様。お初にお目にかかります。」

（・・・『愛し子様』・・・ね。気恥ずかしいんだよねえ、それ。背筋がぞわぞわとするってゆーか・・・まあ仕方ないんだけどね。）
名は体を縛る力があると赤のエンヤが言っていた。

万が一にもガイアスの子であるお前を縛る力のある人間がいるとは思えないが、教えないに越したことはない。と。

気になるようなら通称を名乗ればいいとは言われているが、思いつかないまま今日まで来ている。

目の前に膝をついているのは3人。

「リンドル国王 オズワルド。何の用？」

今さら何だ、と聞いてやる。

すっかり瘦せ衰え、国を、貴族を御する力も失った哀れな王。そば

に控えるのは此度の騒動の原因となった皇太子の妃と第3皇子。皇太子は、テスの怒りで事件が起こった時神殿で死んでいる。

王族相手にぞんざいな口をきく自分に、ピクリとオズワルド以外の二人が反応した。

「此度の件、精霊王は何と？」

「それを聞いてどうする？お前に取りなす力があるとしても？それとも会いにでも行くか？見ることすら叶わぬ相手を。」

パウロが自分の席を用意してくれたのだがそこには座らず3人の前に立つ。

煽る気か？

どういう腹積もりなのか、探ってからでも遅くないでしょ？

話しかけてくる金のオーズにそう返しながら3人を見る。

どっちにしろガイアスに引き合いわせるところか口利きをしてやるつもりもないし。

・・・成程な。テス、お前の獲物だとき。さすがガイアスの娘だ。よく似ている。マルスを置いてゆく。好きに使うといい。

そう言つてオーズは自分の神殿へと帰って行った。後には同じく金に輝く青年が残った。金の瞳に、くるつくるの金の髪。優しい印象を与える外見とは裏腹に、目が腹の中を現わしているかのように感じた。

腹黒そう。

御褒め頂き光栄です。御子様。

褒めてないし……。マルス、テスの領分だ、手を出すな。

……。！御意に。

それらの会話は思考の中でのみ行われたもので、他の人間に悟られることなどなかった。

「我が息子の不始末につきましては、私の恐れ多いことと感じてお

ります。テス様のご加護を戴いたにも関わらず……。」

反省している、だからと話は続く。要は自分たちの国を元のように加護してほしい、贄として皇太子を捧げたのだから、とか何とか……。

（馬鹿だなあ。）

と思う。

テスを宥めてガイアスに取り成しを頼むと言っているのだ。

「あれが生きていれば今後もテスの加護が続いたというのに、愚かだな、お前たちは。」

自分の言葉に耐えかねたように第3皇子が立ちあがった。さっきから聞いてないような素振りをしていたのも気に障っていたらしい。実際聞いてなかったけど。

「父上がこうまでして頼んでいるというのに、平民の分際で……！」
パウロとエセルが庇うように前に出てくるのを片手を上げて制して、向き直る。

「分、と言ったか？お前は弁えていると思うのか？……ただの人間だろう？お前は。」

ゆっくりと視線を上げてゆく。それに沿って第3皇子の身体が持ち上がってゆく。もちろん誰も触れてはいない。自分も指一本動かしていない。

やがて自分の身長くらいまで空中に引き上げられた第3皇子に、階段の途中から見上げたまま言葉を掛ける。

「国をどうする？お前が継ぐか？それとも、兄が死んでこれ幸いと抱いた皇太子妃の腹の中の子が？」

妃が息を飲んでお腹を庇うような素振りを見せた。夫が死んで喪も明けぬうちから、盛んだこと。

「国はいずれ復興しよう、そこに民がいるからな。しかし、お前たちがのさばるのは罷りならん。もう次に国を継ぐ者の選出は始まっている。それはお前たちの預かり知らぬところだな。」

息を飲み込む音が聞こえた。自分たち以外に、誰がと言いたいのだ

ろうが・・・。

「元々国というのは民の為にあるものだ。王族の為にあるものではない。お前らとて最初はただの民だったろう？そんな簡単なことも忘れたか？世界があり精霊がいて、初めてお前たち人間は成り立つ・・・知っていたか？加護持ちが死ぬとき、精霊もまた一緒に死ぬことを。寿命ならば仕方ない。が、テスの愛し子をお前ら人間が殺したんだ。ノール。」

「は・・・つい。」

第3皇子が辛うじて掠れた声を出す。

「この女の腹の子が死ねばお前はテスの気持ち解るか？人は自分が体験したことではなければ実感できんだろう？」

「な・・・にを・・・」

マルス。腹の子だけな。

御意。

皆にも見えるほどにマルスが光り輝き、その手にした剣で妃の腹部を撫でた。「ひっ。」と小さく声がした時には、自分の掌の上に小さな固まりが載っていた。

保健の授業で写真付きで習った胎児。まだ2、3ヶ月の。

「お前の子だ。妃の腹は空っぽだよ。」

驚愕に見開かれる目。それはパウロ以外の人間みなだった。

「斬るか？お前の兄がしたように。テスの愛し子にしたように。」

「斬るか？お前の兄がしたように。テスの愛し子にしたように。」
深い怒りが伝わってくる。腹の中の子だという小さな固まりを掌の上に浮かべて彼はじっと空中に浮かんでいる第3皇子を見つめてい

た。

「その子には・・・罪はつ・・・」

皇太子妃がそう口走って詰め寄ろうとする。と、

「では聞くが、テスの愛し子に何か罪があったか？殺されたあの赤子には？・・・罪とは何だ？オズワルド ノール ユリア。」

3人の名前を呼んでそれぞれの顔を見つめる。

「罪がなくても人は殺されていいのだろうか？ではこの子もよからう？少なくともこの子の親は罪人だろう？母親は夫の弟と契り、父親は兄の妻を寝取った。祖父は国を顧みず遊興に耽り、諸国からそっぽを向かれた揚句、息子の暴挙を止められずテスの怒りを買った。国を民を見捨てて自分たちだけ逃げたのも罪の一つだろう？」

謁見の間に怖いほどの静寂が漂っている。そしてその静かな空間に彼の言葉は続く。

「赤子は目を剝り抜かれた。そしてカイロスに踏み潰されたぞ。加護つきと精霊は一心同体。赤子が受けたのと同じ痛みを精霊も受ける。それがどういふことか解るか？テスの目の前でテスの愛し子は目を抜かれ潰されたのだよ。・・・ノール、ユリア。お前達の目の前でこの子を同じようにしてやればお前達は痛みが解るか？・・・オズワルド、ノールをそのようにすればお前は自分の罪が解るか？先ほどノールが言ったな、“平民の分際で”と。解って言ったか？我は何と呼ばれていた？お前は何と我を呼んだ？オズワルド。」

「い・・・愛し子様・・・と。」

「“誰”の愛し子だと思つて口にした？我は”人”か？お前たちは誰に何を頼んでいるのか解つて口にしているのか？それが許されることだとも？」

解っているのか、と彼は問う。

空気が怒りで震えている。静かな声であるにも係わらず、圧死するほどに重い。その私より小さな背が怒りで溢れ、そして悲しみで染まっているのが解る。

ドサツとノールが空中から投げ出された。

詠星。

精霊語が聞こえた。前回クリスの件が片付いたときに彼に何という言葉と話していたのかと聞けば「精霊の言葉だよ。」という返事だった。その言葉だ。人間には耳にしても意味は解らないし、話せないのだという。確かにどうやって気をつけていても聞く傍から音が霧散してしまう感じだった。

テス貴方に任せるよ。貴方にこそその権利がある。

彼が何かを言うと、急に空気の密度が濃くなった途端そこに緑の精霊が現れた。

“テス神“

その表情は常に穏やかだと言われている。豊穡の神、実りの神。が、

『我がわざわざ来てやったのだ、感謝するんだな。我は”これ”ほど気が長くない。すぐに済むぞ。』

頭の中に直接響く声に3人が青褪め、また彼が反応するのが解った。

”これ”って何だ！ ”これ“呼ばわりか！

早く決めぬからだ、呼びにくくて仕方ない。

何を言っているのかは解らないが、テス神は彼を振り返って笑っている。それは穏やかな笑顔だった。

だって思いつかないんだよ。

困ったような表情の彼にテス神は口を開いた。

タマでもポチでもいいじゃないか。どうせ人間には意味は解らないんだから。

聞いた途端、彼は勢いよく私を振り返った。

「エセル！」

「はい・・・。」

いきなりで間の抜けた返事をしてしまう。

「許す。斬れ。」

私に死ねと言うのか。

5 「タマでもポチでも。」（後書き）

赤〓炎の監視者〓エンヤ

金〓大気の監視者〓オーズ

うゝん、あと二人です。そして詠星の通称も何にしよう……。。

6 「あなた、いいね。」

神殿づたいに、裏のこんもりとした小さな森を抜けると、とたんに声がたくさん聞こえてくる。

（ああいたいた。）

「エセル！ エセル・ソード！」

呼ばれた声に振り返れば、澄ました顔をして彼が立っていた。

ここは神殿隊の鍛錬場だ。森に囲まれて、周囲に被害が行かないよう配慮されている。

「どうなされたのですか？」

駆け寄って行けば、周囲がざわめいた。

「見に来てみた。」

ちゃんとやってるんだねえ・・・と無表情ながら感心したような口調で言う。馬鹿にしている風ではない。

ふっと視線を感じて振り向けば、皆が鍛錬の手を止めてこちらを見ている。初めて見る彼に興味津々な様子だったが、副隊長の私がいるから声は掛けられないようだ。

「神官長は？」

「お仕事だよ、今お城みたい。」

「それって・・・御一緒されるはずではなかったのですか？」
確かそう聞いていた。

「そうだった？」

「そう聞きました。」

「ええ？聞いてないなあ・・・。自分も入れて？」

空惚けた様子でそう返してくるのに、ため息をつく。その返しから、行きたくなくてランバードに押しつけたのがありありと解った。しかも“入れて”とは、もしかして……。

「だ……。」

「どつちにだ。」

だめですよと言いかけて被さってきたその声に横を見ると隊長が立っていた。今朝から宮殿に行っていたはずだが。

「うん……どつちでも？ ミハイル・ブロスワーズ。」風神のミハ」？ へえ……面白い渾名だねえ。」

ねえ彼って……。

ライガの獣人です。主人の一番のお気に入りですよ。

嫉妬だ？

そんな下等なことは……。

じゃあ何で私をぶつけようとするのさ？

マルスは言葉に詰まったように、フンと横を向く。

意味は二つあるのだろう。1つはミハイルが気に入らない。2つには私が気に入らない。自分の主人の関心を持っていくモノは全て気に入らないのだ。

それは解らない感情ではない。ある意味、精霊らしいと思う。精霊は気に入ったものにしか関心を寄せない。あとは自分が魅かれるモノだけにしか、だ。ガイアスが私に構うのは、私を娘だと認めているからだ。自分のモノだと。その執着ぶりはおそらく人間のそれより強いと思う。だって精霊は子孫を残すわけではないから。ガイアスはこの世界が始まってからずっと一人だった。で、物足らなくて

各精霊王を作った。自分の力の一部を分散させたのだ。

まあいい。乗ってやろう。

「誰に聞いた？」

「あなたに加護を授けたオーズの身内の精霊から、だよ。ここにいる。」

「お前……いやあなたはランバード神官長が言っていた……いと……」

言いかけた言葉を最後まで言わず、私はにっこりと微笑んでミハイルに言った。

「素手の勝負を所望するよ。」

魔法なし、武器なしの素手勝負。

それがどういふことか解った上で言っているのか、この少年は……という呆れかえった表情の隊長ミハイルは、茶の髪に金の瞳でさすがに獣人らしい優れた筋肉をお持ちのようだった。

（いやあ〜眼福眼福。ってゆーか、ライガってあれだな、ライオンというより、トラ？）

別に身体に縞模様があるとかではないのだが、耳はある。本物のリアル・ネコ（トラだけど）ミミ。さらに尻尾。

（ああ……あの尻尾は勝負が終わった暁には、触らせてもらおう。お願いしちやおう。つか、触る！、絶対触る！撫でたい、弄りたい、引っ張りたい。）

身悶える私はさぞかし薄気味悪かっただろう。若干、ヒかれてるのが解る。

「本当に、いいのですか？隊長は……」

エセルは心配してくれているのだろう。しかあし！

「エセル。敬語禁止。これ決定事項。……ご心配ありがとう。」

これでも素人ではないから。でも、まあ？ミハイルほど大きな人相手にしたことないから、どうだかね？」

だって優に2メートル越えて・・・あり得ないでしょ、地球じゃ。そもそもどうやら子ども扱いされてるみたいだけど、声を大にして言いたい。19だよ！花の女子大生だよ！

確かに親友より胸は小さいが、サラシ巻いてますが一応あるんですけど！顔だって、中性的だとは言われてたけど、けして男性的ではないと思う！（思いたい、いや、多分。）

ミハイルが、甲冑らしきものを脱いだ。剣を置き、小手を外す。白い薄手の上下からは身体にも獣毛は生えてないのが解った。（だって肌の色だったもん。）

私も服を脱ぐ。そう、こっち来て服はどうしてるのかってゆーと、こちらの世界の規制の服を貰った上で、ちょちよいと改造しております。ちなみに裁縫はマイナス評価でした。魔法ですよ、ま・ほう！！すっごい便利です。頭の中で思い浮かべて（こうしたいなあ。）と思うと、その通りに変形してくれるんです。ブラボウー 魔法！ ビバ 魔法！

針で指を刺し刺し必至に縫った拳句、出来上がる頃には布が血で染まり、気持ちも身体もマイナスで、ついでに評価もマイナスだった頃には考えられません。

「では、始めようか。」

エセルが森で見つけてランバード神官長が連れて帰ったという少年のことは聞いていた。会ったのは、今が初めてだが。ここ4日間、おれは宮殿の部隊に稽古つけに行っていたからだ。

少年と言うには華奢すぎ。少女と言うにはふてぶてしそだった。格闘場の脇に控えているエセルだって少年の時には女と見間違っただったから、それに比べれば中性的だ。

腕か襟を掴もうと腕を伸ばすと、ぎりぎり触れない距離に下がられる。

その足裁き、所作。さっきエセルに「素人じゃない」と言っていた通りのようだ。

カシユと呼ばれる胴に巻きつける形で着る服から覗く細い腕や、作り直したのであろう、おそらく元は同じようなタロン（パンツのこと。）が描き出す長くも細い足のライン。

『少女』だと言われれば、そうかもしれないと思うのだが・・・。

「手加減したら、ハッ倒しますよお。」

につこりと向けられた言葉に似合わない笑顔と、その黒い瞳に映る負けん気の強さ。

どっちであろうが、知ったことではない。

（楽しめそうだ、久しぶりに。）

「そ・・・の体術は・・・何と・・・？」

突っ込んだ腕を軽く取られ、脇に流されてしまう。さっきからそんな状態でまともに身体に触れない。

周囲は最初は囁きたてたりしていたが、今では息を飲んで見守っている感じだった。

それもそのはず。隊長である私が先ほどからまともな一撃を加えられずにいるのだから。

彼の繰り出す武術というのは、見たこともないものばかりだった。しかし、それを言い訳にするには彼は強かった。飛ばすくらいの力を込めて突きをくり出せば、するりとそれをかわされるばかりか、受け流される。私にとっては精神的ダメージが大きく、彼にとって

は私の威力が解りダメージがない。

「合気道って・・・ゆーんだよ。・・・さすがに避けてばかりじゃ倒せないよ、ね！」

”ね！”のところであつて彼の身体が浮いたと思ったら、次の瞬間には首に向かつて回し蹴り。間髪、腕で受けた。

「アイキドー？」

「うん、爺様に教えてもらったんだけど・・・。今の蹴りは・・・空手ってゆー・・・んだ！ああ、くそ！」

回し蹴りから着地をしないまま、その足をまたもと来た方向へと切り返してきた。それもまた受ける。

「カラテ・・・、つ。」

腕を下げて目の前に構えをした彼が立っていた。肩幅に開いた脚はセオリー通り、両の拳を握りしめ、目が合うとにやりと笑う。

「あなた、いいね。すっごい楽しい。」

こちらこそ、だ。

「あーっ！ 悔しいなあ。まあでも当たり前か。」

地面に倒れ仰向けに空を見上げて叫んだ彼は、それでも言葉通りに悔しがっているというよりは楽しかったと瞳が言っていた。

「スタミナが足らん。もっと鍛錬を積みばまだいける。」

かくいう私もその横に座り込んでいるのだが。

「・・・だよねえ…。爺様にも言われてたんだけど、こればかりは、鍛錬じゃなかなか・・・。」

2リル（1リル＝1時間くらい）ほど打ち合っていたが、がくと彼の体力が落ちたので、私の勝利になった。

「しかし、私を2度も投げ飛ばしたのはあなたくらいだ。びっくりしたよ、こんな細い身体から繰り出された投げ技には。」

と伸びていた彼の腕を取る。本当に細い。ちよつと力を入れて捻れ

ば折れてしまふくらいに。まるで……。

「シャワーを浴びていくか？ 気持ち悪いだろう、それでは。」

官舎には風呂もあるが、と誘うと彼は「いいや」という風に首を横に振った。

「この先に大きな池があるだろ？　そこでちよつと泳ぐよ。……
・”寄って行け”って煩いからさ。」

“何が”寄って行けと”煩い”というのか、彼が何者であるかを知っていれば聞かなくとも解る。

「ありがと。」

彼が立ち上がって服の埃を払いながら言っ、手を差し出した。その手に自分の手を添える。

「こちらこそ。また来るといい。皆もあなたとならいい鍛錬になる。怪我をしない程度に。」

白く細い指がするりと離れて顔の横で振られた。

「うん、お邪魔するよ。じゃね。」

その後ろ姿に周囲の兵から声が飛んでいた。「かつこよかったよ。」
だの「なかなかやるな。」「今度は自分と。」だの……。それを見送りながらふとさっきの自分の心情を振り返った。

（”まるで” 何だと思った？）

6 「あなた、いいね。」（後書き）

彼らは神殿警備隊で、第一部隊が魔法部隊、第二部隊は武器メインです。

武闘派のミハイルですが基本は第一魔法部隊隊長。獣人は基本型は人型二足歩行、耳と尻尾は常に出ている状態です。完全型は獣、二足歩行のまま獣毛が全身に生え、牙があるものは牙も生えます。

7 「パパって呼んで！」

池は湖ほどは大きくなく、でも池というには大きかった。

そこにすべてを脱いで飛び込む。

御子様。

プカ・・つと水面に水色の髪が広がり、青い瞳の精霊が顔を出した。気配で解っていたからびつくりはしなかったが、冷静に考えれば、怖いよ。

だって水面だよ？ 髪が徐々に広がって人の顔が浮かぶんだよ？

どこの怪談だよって話でしょ？ 以前の私だったら速攻攻撃してるって・・。アブなっ。

なあに？

って返せるけどね、今は。

主人がきます。

さっきの鍛錬について話していると、アーリーが質問してきた。なぜ、魔法ではなかったのか、と。

うーん・・。だって多分、うーん絶対被害が甚大そうだったから。

そう言うと、ああ・・と深く肯きながらアーリーは微笑んだ。

肯定しますか。

あの時はひどかったですからね・・・。

フォローもなしですか。

オーズの結界が割れたのを私は初めて見ましたよ。ガードに回ったアルファが慌てたのもね。

何気に追い打ちですか。 ひどいです。

な・・・何なんですか・・・これは。
アルファと反対側に回って修復を行っているアーリーがそう呟いた
声は、今ここにいる王たち皆の心の声だった。

【解放】

詠星が異世界の言葉であり、彼女の母国語でそう呟いた途端だった。
自分たちでさえ目を開けていられないほどの光が満ち、激流のよう
な力がオーズが万が一と言って張った結界の中を覆い尽くした。
そして・・・。

・・・ヤバイ。もたないぞ。
ため息に似たオーズの声が聞こえて、そっちを見た時だった。ピキ
ピキッと亀裂の入る音がして結界にひびが入り始めたのだ。

マジかつ！

横でユファが叫び、対のアルファと共に結界の外に飛び出すとオー
ズの結界の更に外側から二神の結界を掛ける。瞬間、パーンという
甲高い音でオーズの結界が割れて中心にいる詠星に光が降り注いだ。
ガイアス。

うつとりとした詠星の声が聞こえる。驚異的な速さで学んだ精霊語
が。

何だい、娘。

湧き上がってくるこの力の源は何だ？

輝きを増す詠星が呟いて中に浮かぶガイアスを見上げる。

あなたの力だ。そしてそれは我の力でもある。

精霊の力を使う前に、その力を身体に馴染ませるためにも一度解放
した方がいいとガイアスが言ったので、オーズが万が一に、と結界

を張った中での解放になった。人間として育った詠星には必要ではなかった力に、こちらの世界からはガイアスが向こうの世界では龍神が、それぞれ詠星に呪を掛けて守ってきた力。それが今枷が外れ、結界の中渦を巻くように暴れている。それはまさに歓喜と言っている。

その歓喜の渦の中、クセツ毛の髪を靡かせて、細い身体から信じられないほどの力を放出させながら詠星は微笑んでいた。

正直、こちらへと詠星が運ばれて来てから、無表情な顔以外見たことがなかったからドキッとしたことは秘密だ。

これは・・・、気持ちがいいな。自分が広がる気がする。ギシギシと、嫌な音がする。

それはユファとアルファの結界が軋む音。ガイアス・・・と意識を向けると、彼は肯いて、

詠星・・・溢れる力を自覚できるか？

そう詠星に問いかける。

うん。解るよ。貴方と同じ真っ白だ。

うつとりと詠星は答える。夢見心地な声で。

その力を小さく纏める様な感じで、丸めてあなたの前に・・・。いうと、圧倒的な力が弱まり凝縮された感じで詠星の前に光り輝く珠が現れた。それは虹色の輝き眩しい光を放って、まるで詠星の魂そのものようだった。

綺麗だな。コレが自分の力？

目に見える形で言うならば、ね。それを貴女は修めないといけない。取り込む、という方が解りやすいだろう。でないと、彼らのが持たないよ。聞こえる？悲鳴を上げている。

それまで、詠星はまったく目の前のことだけで、我らに気をやっていなかったの、その時始めて我らの状態が解つたらしかった。

吹っ飛ばされたオーズが結界の外の地面に寝転がっていることや、ユファとアルファが必死の形相で結界を保っていること。その結界を強化するために、あとの者が更にその外側に控えて力を分けてい

ること。

常識的に考えてみれば、解ることだった。詠星はガイアスの娘。彼の力の塊であり、彼と性質を同じくする唯一の者。

” 我らの創造主と同じ。 ”

であれば、我らより“上”。

たとえそれが我らから見れば小さな“人間”という形の中に納められてはいても、力の質は同じ。けして箱物の大きさが小さいからと言って力が小さいということはないのだ。それを完全に失念していた。

お前たちも、解ったな？

それは我らへの警告でもあった。

我らが気持ちの大小はあれど、少なからず詠星を軽く見ていたことをガイアスは気がついていた。そして、警告も教えることもせず、まずは力を解放させたのだ。また、それをして”詠星”という器が壊れるということはないと解った上で。

“私の娘を甘く見るな”と。

ガイアス。ユファが・・・保たない。

あゝ・・・マズい！

大地のアークの叫び声と詠星の声が聞こえた途端だった。

ズシ・・・ンと大地と空気が震えた。身体のない我らたちが、地面の叩きつけられたような大気の圧力と共に詠星を中心として圧縮された力が爆発した。

外側へと吹き飛ばされる意識にブレーキを掛け、我らを受け止めたのはガイアスの力だった。

詠星

たった一言。

詠星は圧力の中心にいた。まだ放出される力に振り回されながらもガイアスの方を見上げる。

詠星

もう一度ガイアスが言うつと、こつくりとそちらへ肯いて瞳を閉じる。真っ白に覆われていた視界がだんだんと収まっていき、内側から力の放出、外側からはガイアスの結界に挟まれて悲鳴を上げていた意識が楽になった頃、中心にいた詠星は。

あれは・・・何？

エンヤがそう呟いた。

後から聞いた詠星の話ではそれは座禅という座り方らしく、その座り方をした詠星が拡散された力を傍に寄せつつ、それを分散させていた。

我らだ。・・・彼女は凄い。

アークがうつとりと呟く。

詠星の周りを縦横無尽に飛び回る手のひら大の珠は、赤・黒・白・金・茶・青・緑。そして動かず額の前に輝く虹色。

それは我らとガイアスの色だ。

それがやがて一つずつ詠星の身体に吸い込まれていくたびに圧力が減っていく。

最後に額へと虹色が吸い込まれると、一気に通常に戻った。

ああ・・・解った。

【修復・復元】

その小さな口が呟くと、見る見るうちにクレーター状に押し潰されていた大地が元のように盛り上がり、吹き飛ばされて跡形も無くなった木々が何倍という速さで成長した。木々の下に咲いていた花々すらも。

・・・。へえ、うん、やってみる。

言っと、詠星は徐に立ち上がり、倒れ込んでいたオーズの傍まで来ると彼の身体に手を翳した。すると完全に意識を途切れさせていたオーズが元の状態へと戻っていった。

もう・・・いい。

うん。・・・。ガイアス父上。じぶ・・・私は貴女の娘としてこの世界で生きていこうと思う。いい？

すっと立った詠星はガイアスの方を見上げてそう言った。

漆黒に輝く瞳はきらきらと内から虹色を宿し、まるでガイアスと同じように肌は内側から白く発光している。

ああ。

ガイアスの嬉しそうな声が返事をした。

ありがとう。

こちらこそありがとう。今まで守ってくれたこと。そして生んでくれたこと。呼んでくれ、た・・・っぐえ・・・。

小動物の潰れたような声がしたと思ったら、ガイアスが人型になって詠星を抱き潰していた。

パパって呼んで！

ガイアス！

遠い目をした我にブチブチと愚痴を零す。

アーリーたちだってさ、まるで仕返しみたいに扱いたる？オアイコだよ。

と。
水の上に身体を投げ出すようにして浮かんでいる姿は、まるで我を全面的に信用して安心して頼ってくれている感じがして嬉しくなる。

そんな気持ちは、おそらく詠星には解らないだろう。

ガイアスの娘だというのなら、我らにとってもまた娘同然。仲間であるという意識は急速に我らの中で庇護欲を膨らませていった。

仕返しとは心外な。我らはただ詠星が困ったことにならぬよう鍛えただけの話。貴女の爺様と同じだろう。

・・・つぐう。

・・・の音も出ないといった感じで詠星は唸ると水底に沈んでいった。

オーズは我よりも気が短いぞ。

そう呟くと、大気の塊が揺れた。

(ん?)

水辺に座って新しく生まれたばかりの精霊と遊んでいた詠星が気配を察知して振り返ると、そこにはミハイルが立っていた。

「ミハ。」

「ソナタ・・・。」

驚きで固まっているミハイルを置いて、「ああごめんね。」と言いながら薄絹単衣を纏っただけの詠星が

【乾燥・装着】

呟くと、池に潜って濡れていた全身を風が纏い瞬間渴いてしまうと、横に置いていた服を着た状態で立っていた。

「用事だった?」

「・・・い、いや、なかなか戻ってこぬから、そのまま神殿へ帰ったのかと思っておったのだが・・・。オルセル殿が探していたのでまさかまだと思って来たのだ。」

「ふうん・・・何だろ。」

解った、と言って詠星は神殿の方へと踵を返す。

「そなたは・・・おん、いや女性、なのか?」

やはり気が付いていないまま対戦していたのだな、と思った。“風

神のミハ”は、女性にはめっぽう弱いと噂だからおかしいとは思ったのだが、もしかして知っていても只者ではない者と対戦することと喜びを感じてそっちを優先させたのかと。それと言うのもミハイルは女性には弱い、好敵手を見つけるとその喜びで剣を震わせる、とミハイルについている精霊が言っていたからだ。

「・・・女性が男性かということで聞かれれば、女性かな。」

何でそこで疑問形なのだ。

つい突っ込んでしまうが。

だって、ガイアスの娘であるわけだから、どうなの？精霊って性別があるの？

思考で詠星から返事が返ってくる。

（なるほど。）

それが頭にあるわけか。

「その前に“お前は人間なのか？”と聞かれるかと思ったよ、ミハ。優しいね。・・・じゃまた遊び行くけど、普通にね。普通に。」
背を向けてしまうと詠星はさっさと脚を進めて神殿へと歩き出す。

見られた！見られちゃったよ・・・アリスと戯れてた間抜けな顔。恥ずかしい！

（気にするところはそこか？詠星・・・。ほぼ真っ裸を見られたというのに。・・・残念な奴だな。）

アーリーは人間のようなため息をついた。

7 「パパって呼んで！」（後書き）

青〓水の監視者〓アーリー
茶〓大地の監視者〓アーク
やっとなみな・・・。

8 「これ、いる？」

謁見の間にはえらく身なりのいい青年がいた。

「愛し子様。」

こちらへ、とパウロが導く椅子には座らず、横に立つ。

「誰？」

「この国の宰相であられますマーカス・ジュエ・ハークエンド様でいらっしやいます。」

銀の髪に薄青の瞳。先ほどのミハよりはわずかに低い身長ではあるが、それでも2メートルは下るまい。

（何でこの世界の人間はこんなデカイわけ？）

星自体が大きいからですよ、御子様。

心話でマルスが返してくる。地球よりも十倍近く大きいんだって・・・。知らなかったよ。

この人、顔いいけど加護付きじゃないんだね？

後ろに立っているマルスへ問うと、

別に顔で選んでいるんじゃないやありませんよ。それも審査対象に入るといっただけですから。“魂”の透明度で選ばれるのです。

呆れた風に怒った風に返される。

だって、魂って・・・。生まれたばかりの赤子は綺麗なんじゃない？穢れなんて・・。

”輪廻”ですよ、御子様。この世界では生まれ変わりは存在します。パウロがいい例ですし、記憶はなくとも魂は前世の罪も善も何もかもを背負います。ですから、生まれる前に”魂の格付け”があるんですよ。解りやすい例でいえば、クリスの両親はクリスを授かったことで魂の格が一つ上がり、庇って亡くなったことでまた一つ上がりました。それらは全て魂に刻まれ、新しい人間へと生まれ変わる浄化によっても消えることはありません。罪が許されるという

ことはないんですよ、ここでは。

（シビア……。世界が違えば常識も違う。）

死してなお、罪は許されることはない、転生後も、とは。次の生で前の罪を償っていかなければ、またその次の転生でも……。と罪は引き継がれてゆくと。

彼の前世をご覧になりますか？理由が解るでしょう。

いや、まあ機会があったらね。（……ってゆるか気にはなるけどそれこそ覗き見つばい。）

「愛し子様にはご機嫌麗しく……。」

（……見えますか？型どりのおべんちゃらは退屈だな……。まあそれが仕事なんだろうけど。）

でもすごいな、この人、と思うのだ。

思ってもいないことをすらすらと言えちゃう辺り、おそらく歳はそう上ではないだろうにちゃんと“仕事”してる。それが心がこもっていればなおいいんだろうけど。しかも“思ってます”って相手に解っても構わないという態度が大物です。

「うーん……。それいつまで続く？失礼を失礼だって解っててやってるってことは、やめてもらってもいいってことだろ？パウロ、裏の池に新しい精霊が住むことになった。勝手をして悪いが、どうやら自分がやってしまったらしい。」

もういいやつ、てマーカスの言葉を遮ってパウロにそう言うと、それはまたどうして、と聞かれる。

「ミハと鍛錬した後、アーリーに呼ばれて池へ行つたのさ。”ここで汗を流していけばいい”と言われたから潜ってみたら池の底に綺麗な小さい貝があつてね、拾って上がっていじってたらどうやら力を注いでしたらしく、次の瞬間には生まれてた。」

肩を竦めて言うと、パウロは微笑んだ。
この人の笑顔は好きだな……。最初からこの人はなんでか好きだが。

「名は何と？」

「アーリーと自分で考えてつけたよ。あとで教える。女の子なんだ。綺麗だよ、パウロもみれば解る。」

なんて話を完全無視して話していたのだが、先の客のようにマーカスは切れたりしなかった。

御子様

マルス？・・・ああ解った、ありがとう。

送られて来た映像を見て階段に座り、その数段下にいるマーカスに声を掛ける。

「これ、いる？マーカス。」

ぱつと目の前に現れた男二人を指して言ったのだが、マーカスは顔を上げてびつくりしたように彼らを見た。

(ふ・ん。)

「いない」と言ったら、どうなさるのですか？」

と言うマーカスに、二人はギクツとしたように蒼褪めてゆく。

宙に浮かんだままの彼らからガマの油のように汗が落ちそうだ。

「それは、貴方が知る必要はないだろ？だって”いない”のだから、どっちにしろ彼らは使えないよ。加護も力も“抜いた”から。」

マーカスと彼らは目に見えて驚いた顔をして私を見た。

「できる・・・のですか？そのようなことが。」

マーカスの声に真実の気持が混ざる。

「出来る”よ。貴方が我を“愛し子”と呼んだその意味を考えればね。」

ハッと息を飲んだマーカスに対して、

「う、そだ。できるはずがない！」

二人は口々にそう叫んだ。まあね、解ってたけど。

「ならば試せばよい。」

宙から降ろされた二人は、可笑しいほどに呪文や操縦をしながら力を行使しようとしている。それをパウロと彼は面白そうに微笑んでみていた。馬鹿にして微笑んでいるのではないのは表情で解る。目が嗤ってないからだ。

「加護を取り上げられた人間がどうなるか、知っているか？」

彼らに、ではなく、俺に彼は尋ねている。

「いいえ、見たことも聞いたこともありません。」

「そう？ いたらしいぞ？ マルスが言うには。まあ、消えちゃえば同じか。」

「マルス」？

「ああ、風の眷属がな、ここにいる。見るか？ 見えなくとも見えるようには出来るよ、今だけならな。」

と言いながら、人の返事は聞かないでタンタン・・・と階段を下りて来ると、俺の両目に軽く息を吹きかけた。

開けていいよ、と言われ目を開けると意外に近い場所、彼のすぐ後ろにその眷属が浮かんでいた。

金の髪に金の瞳。優しげに見えるようで、人の気持ちを解さないであろうほどに厳しい雰囲気。

そしてかなり上位であろう力。それは輝き方で解る気がした。

御子様。

彼が何かを口にする。それは俺たち人間には聞き取れない言葉のようだった。

ああ。パウロを。
言ってすぐだった。

「愚かだな、ジューン。」

魔術師の片方、壮年の男の方が短剣を持って彼に斬りかかっていた。いや、斬りかかった姿勢のまま見えない壁の向こう側でその壁を叩いている。

もう一人は知らなかったのか、驚いたまま固まっていた。

「あれがお前たちが探していた間者だぞ。どうする？」いるか？」
完璧無表情な彼が俺を振り返っていた。

ジューンはミハイルたちに拘束され、牢へ連れて行かれた。その際、彼が「心配ないよ、彼はもう“力”がないから。」と言付けていたが、加護持ちであるミハイルには解っていたようだった。加護つき同士は互いの精霊が見える。では彼は？

「見えないよ、自分についてる精霊は。加護付きと違って契約をしている訳ではないからね。・・・ベント。」

もう一人の元加護付きの名を呼ぶ。

「は・・・はいっ！」

平伏している彼は顔を上げることすらできないようだった。当たり前か。

「君、加護を返してほしい？」

「へ？あ、はいっ！」

その時、また彼・・・マルスが何やら彼に言っているのが見えた。それに彼が肯いてベントへ言葉を掛ける。

「条件があるけどね。今までついていた精霊とは格が下がる。つまり力が下がるということだ。今までのような力は使えないよ。それは君への罰だから。受けなければ貰えない、受ければ貰える、格が下がるということだけど。それでも返してほしい？」

何故？という顔をしている彼と、多分俺も。

「君は知っていた。・・・と言うか薄々勘付いていたろう？ジューンがおかしいことに。疑いながらも一緒についてきたね？真実を知る

うとしない者は愚か者だ。しかし真実に気が付いていてなお目を瞑ろうとする者は罪を負うべきだ。君は自分の保身に目がいつて精霊を穢した。君の穢れは精霊が負う。それが我らには許せない。神殿で誓いを立てた時、パウロから言われたろう？それを犯した罪は重い。君の魂は一つ穢れた。このままでは次の生で加護は得られないと思え。」

ズシンと圧力が押し掛かる。その言葉一つ一つにベントが恐れ戦いているのが伝わってくる。が、

「それでも！ それでも私はシールと共に今まで育ってきました。精霊は私の身体の一部。失って生きてゆくことは考えられません。どうか……どうかお願いします。」

伏して頭を下げる彼の言葉に嘘は感じられなかった。そしてその横には薄い影が。

「ではシール。お前は？お前は どうしたい？」

彼の言葉にシールと呼ばれた精霊は顔を上げ何やら話している。薄いながら色は解る。緑の真っ直ぐな髪と同じ色の瞳の精霊。

「そう……ではお前の力を削ごう。それでいいか？ベントの罪はお前の罪。導いてやらなかったお前のね。また二人で協力して成長すればいい。」

言って彼が手を翳すと、精霊から薄い膜のようなものが彼の手に吸い込まれていく。それに従って精霊が小さくなってゆく。

「ベント。シールはお前を選んだ。感謝しろよ。お前のせいで穢れたシールはそれでもお前と共に生きることを選んだんだ。彼の力は恐らく今までの半分だろう。心して力を成長させるんだ。保身に心を揺らすな、君は少しそこが弱い。二度はない。次は有無を言わず取り上げる。でなければシールが消滅してしまうからな。」

「はいっ……はいっ！ ありがとうございます。シールごめん、ごめんなさい。」

そう言っただけでベントは今度は泣いて伏してしまった。ため息をついた彼にランバード神官長は微笑んで「私が……。」と言って彼を連れ

て出て行ってしまった。

何時から知っていたのか、と聞くと彼はまた軽い口調に戻っていた。

「ここにはパウロと自分の結界が張ってあるから。どちらかに不信や反感を持ったり、敵意を持った状態で侵入すればその時点で。そうだよ、だから貴方も。」

と漆黒の瞳が向けられる。

漆黒の瞳と髪。

” 精霊の愛し子が現れた “

そう話が広まったのは最近のことだ。

そんな事は今まで一度だつてなかったことなので俄かには信じられなかったが、今朝ランバード神官長が名を戴いたこと、そして今現在神殿にいることで城内は騒然とした。

精霊の加護付き自体数が少ないのだ。その “ 力 ” はそうそう見るこ
とができるわけではない。その上 “ 愛し子 ” などと。

（信じられるか？）

それが一報を聞いた時の俺の心境だった。俺には加護がついてないから、もちろん精霊など見えない。だから元々加護付きの人間の言うことすら半分聞いているくらいの気持ちだったからだ。

「私が？」

「 馬鹿なことを “ と言ひ、パウロを嘲った。 ” とうとう身内から変な奴が出た “ と弟のエセルを家から追い立てるように出した。 ”

寝言は寝て言え ” と危険があると忠告した加護付きを突き飛ばし戦場へ向かった拳句、案の定大怪我をして結局加護付きに治療してもらったね？ まだ言おうか？ 」

それは今までの恥を聞かされているようで猛烈に恥ずかしかった。いいえ、と首を横に振る。

してきたことを思い返せば、ただの子供の駄々だ。ただただ羨ましさから出た行為。自分ではなく弟へついた加護への嫉妬。

「謝れば？兄弟だろう？」

その後はいつ呼んだのか（後から聞けばエセルの精霊に直接呼びかけたらしいが）、エセルが静かに現れて俺の横に膝をついて彼を見上げた。

「エセル、彼が話があるんだって。」

勝手にそう言ってしまう。

「・・・何でしょうか、ハークエンド卿。」

家から出た後騎士団に入ったエセルは、ハークエンドから籍を抜いた。それを知ったのはかなり経ってからだったが、その時初めて自分の行動に責を感じた。

辛く当った子供時代、幼いとはいえエセルは賢い子供だったから俺に嫌われていると解っていた。だから俺に近寄らなかつたし、極力目立たないように暮らしていた。騎士団に入った後、あれはじつと家を出る年齢になるのを待っていたのだと解る。城ではなく神殿の騎士団を選んだことから。精霊など・・・と普段から言っている俺が罷り間違つても神殿へ足を運ぶことなどあり得ないからだ。つまりは・・・俺と会いたくないからだ。当たり前だ、俺だって逆の立場であつたら嫌っている相手になど会いたくはない。

籍を抜いたと聞いた後、何度か城で仕事に声を掛ける機会があった。その時返された言葉は、

「何でしょうか、ハークエンド卿。」

今繰り返される、この言葉だった。

感情の籠らない瞳。感情の現れない顔。こんな弟にしてしまったのは俺の罪なのだと。

「喧嘩をしたのなら、悪いと思つた方が謝ればいい。子供だつて知つてるぞ？」

8 「これ、いる？」（後書き）

ツンデレを虐めてみました。

9 「代償は払って貰うから。」

「で、何だっけ？用事。」

「聞いてないんですか？」

まるで同僚に言うような口調のエセルに焦る。

「ああいいんだ。自分がエセルに“敬語禁止令”を出したんだからね。何といってもエセルは自分が初めて遭遇した人間だし、自分を監禁した初めての人間だから。感慨深いね。」

彼がそう言つと、エセルが焦つたように言葉をつなぐ。

「監禁・・・って、仕方がないじゃありませんか・・・じゃなかった、仕方がないだろ、結界内のあの森に見知らぬ人間がいたんですから。怪しんで質問した私に答えたあなたも結構いい加減な回答でした！副長権限で収容した私に罪はないと思う。しかも収容した部屋からだつて簡単に出たじゃないか！」

言葉が混ぜ混ぜになつて、逆に子供っぽいエセル。

「だつて牢屋だつたじゃない。綺麗な方ではあると思うけど、お腹空いてたのにあんな食事じゃ・・・。だからさつさとパウロに会っちゃえつて思つたからさ・・・。いいじゃない、過ぎたことは。」

「その過ぎたことを持ちだした張本人のくせに。」

まるで小さな子供の時みたいに拗ねているエセルに遙か昔となった姿を思い浮かべた。

「で？」

といきなり話が振られびっくりして彼とエセルを交互に見た後、我に返つて本来の目的を思い出す。

「陛下がお会いしたい、と。」

薄く微笑みながらも完全な無表情な瞳で彼は返してきた。

「何で？」

「昨日の神官長召喚の折に、ご一緒して戴けるものと思っておりましたが、いらつしやらなかったので本日私が使者として参上いたしました次第です。ランバード神官長より、“愛し子様がご訪問されている”と伺ってから、”是非会いたい。”と毎日のように陛下はおつしやつていらつしやいます。」

とそこまで話すと、彼はコテン、と首を傾げて言った。

「じゃあ、来れば？そちらが。」

(・・・っな・・・！)

「・・・っていう自分を不敬だと思う？ あかね、自分はこの国の人間ではない。その王に仕えている訳でも仕える気もない。だから聞きたくない命令は聞かないよ。そんなことの為に来たんじゃないよ？ なのに何で自分が会いに足を運ばなくてはいけない？ これを聞いて”じゃあこの国にいることは罷りならん”と言っんなら、いいよ、出て行っても。別にこの国にいる必要もない。自分がこの国に来た目的はパウロだから。パウロに新しい名を授けることが目的だったんだから、それはもう済んじゃったし？」

まるで態と言っているように聞こえる。

怒らせるように、そしてその後の態度を見るように。

試されている、と思った。俺の力量を。

「・・・ではごさいますように、私からも是非愛し子様には王城へ来ていただきたいのです。」

真っ直ぐな瞳が射るように俺の顔を見詰めている。だからこっちも負けないくらい真剣に見詰め返す。

マルス。

彼がまた不思議な言葉を口にする。それに従うかのように、彼の横の空間に一人の男が現れた。金の神と金の瞳。ひと目で解る属性に威圧感。精霊だ。

・・・。

「・・・ふうん。なるほどね。・・・エセル。」

「何ですか？」

「王太子と同級生だって？ エセルの方が格好いいって、よかったね？」

と。

「誰が言ってるんですか、それ・・・。」

「精霊たち。頭の方もエセルがいいって？ それでかなり嫉妬されたって話だね。犬猿の仲って？」

初めて彼が笑うところを見た。につこりと焦っているエセルを見てさも嬉しそうに。そして言ったのだ。

「エセルがついて来るならいいよ。ただし自分呼びだす代償は払って貰うから。」

「“代償”とは？」

不吉な言葉に聞き返すと、彼は、

「お楽しみは後からだよ。」

とそれこそ怖いくらい優しく微笑んだ。

なあ・・・と横からの声で、やっと回復した身体を持ちあげる。

さっきまでの鍛錬で相手をしてもらったのはいいが、ケタ違いだった。自分自身も周りも、呆氣にとられるほど威力が違いすぎた。これで全力ではないというから、だったら全力だとどうなるのかと聞いてみたら、

「わかって聞いている？ “誰”の愛し子なのか。」

と、返された。あからさまに皆言葉に出さないが、解っている。

彼は、いや彼女は我が世界の唯一神“ガイアス”の愛し子。
数々の精霊王たちが膝をおる“神”の“唯一の娘”。

そう、娘であるにも拘らず、その風貌や言動から皆“男”だと思っ
ていることを伝えると、

「知ってるよ、それでいいんだ。ああ、口調は元々こんなだよ。ミ
ハもバラさないでね？バラしたら、ミハが覗きをしたってバラすよ。」

「あれはっ、けして・・・！」
焦って噛んだ。

「解ってるよ、自分の着替えを覗くほどミハは女に困ってないもん
ね。聞いたよ。モテるんだって？“クールで女性に優しいミハイル
隊長”」。花街を歩けばタダでいいって待つ女の人が大勢いるんだ
って？」

ブツと、愛し子の前だというのに吹き出してしまう。

「な・・・なっな・・・。」

「な？」7人？へえ、それって多いの？少ないの？」

絶対解ってて言ってる顔だった。

「違う！誰に聞いた！エセルか？トムか？それとも・・・。」

「メアリー。」

意外な名前に、固まる。

”メアリー”・・・愛し子様付き女官。ランバード神官長が街で拾
って養子にして育てた赤毛の少女。花売りをしていた母親が死んで、
家賃が払えなくて家を追い出され行く当てなく路地の暗がり死に
ゆくだけだった4歳の少女。それをたまたま通りかかった神官長が
拾い上げ、手当てをし養子に加えた。ランバードの養子は6人いる。
最後がクリスだ。皆親がいない子ばかりで、神官長はその子たちを
我が子と呼んで育て上げた。

「私は生涯を神に奉げる身、もし結婚したとしても家庭より妻よりも神を取るでしょう。ですから、結婚はしません。そんな私に神が下さった家族がこの子らです。ありがたいことです。神とこの子らに巡り合うために私は生まれてきたのです。」

ランバード神官長の凄いところは、それを心から言っていることだ。神職だからとかそういう義務感や世間体、建前などではなく、心からそう思い行動し、何一つ私利私欲に走らない。なるべくして神官長になった方だと皆が思っていて尊敬している。１年前に養子になったクリスはただだが、あとの５人は皆成人し、メアリーののように傍にいる者もいるが、街へ出た者、我らのように騎士となり誰かを守っている者それぞれだが、皆やはり清廉潔白な人間ばかりだ。

「可愛かったよ？メアリー。嫉妬しちゃったのかな？ちよつとばかり口調がきつかった。自分のことで勘違いをしてたみたいだけど、その誤解も解けたんだし今度から睨まないでね？」

その言葉にうつとなる。睨んで・・・？

「・・・ましたか？」

「・・・ました、すつごく。頭から噛み付いてバリバリ喰われそうだった。別の意味でメアリーも喰われそうだよ。」

最後のニュアンス。

「横取りしそうな心当たりが？」

その言葉にこつくと彼女は大きく肯いた。が、しかし。

「条件があるよお。」

と。

「何なりと。私が出来ることでしたらば。」

「二つ。」

こちらが肯くと、

「第二隊のアーシド、同じくマックライン。あとさつき名前だ、トム・レイノス。」

そんなに？

「驚いちゃだめだよ、だってこれこつちだけね。あと王城にもいる

から。・・・だから条件その一。」

と彼女は指をピツと自身の鼻の前で立てて、注意を引く。

「早くアスレッドの花束を持って来い。本数は・・・知ってるよね。色は彼女の好みに会わせろ。」

「はい。」

「その二。街で一番美味いと評判の“メイカーズ”のケーキ。丸で一つ自分に買ってきて。両方とも期限は1週間後のメアリーの誕生日までに。」

「御意に。愛し子様。」

なあ・・・と話しかけられたのはその後のことだった。

「国王ってどんな人？」

宰相閣下が来たことか、と視線で問うと。

「まあね、知っておかないと。」

としらつと返す。

「お知りになられても、態度を変えられることはないと推測出来ませんが・・・。」

こちらもしれつとそう言うつ、彼女は肩を竦める。

「鋭いね。まあ予備知識？」

何で疑問形なのかは不安があるが、自分の率直な意見を述べる。どうせ嘘をついたところで、愛し子にはばれるから。

「部下の私が言うのもおこがましいですが、よい王ではないかと思っております。他国に対してむやみに好戦的ではなく。ただ、少々慎重すぎる方かと。貴族の突上げに困ってらっしゃったり、3年前の北部の時も、救済措置を遅らせてしまったりと。その決断の遅さがあの虐殺を生んだと思っております。しかし慎重だからこそ、大きな間違いは起こしておられません。」

聞かれれば不敬を理由に処罰を喰らってもおかしくないほどに、あからさまに言っ たつもりだ。

「おお、齒に衣着せぬ言い方。正直者。」

茶化した感じで言う彼女だが、にやりと笑う。

「探りは入れてらっしゃるのでしょうか？」

と聞けばあっさり。

「うん。いろいろ。でも人から見たらって点が欠けてるからね。あの子たちはある意味中立だけど、人ではない。人の心の機微は解らないから。」

「そうですか。では陛下よりも王太子殿下にお気をつけられた方がよろしいかと。悪い方ではないんですが、やはりそういう教育を受けていらっしゃる分、何というか・・・。」

「“高飛車” “我儘” “傲慢” な王太子？ ” あれが次期王ならば、国内は乱れる。”？ 噂が絶えないけど、噂されるってことはそれだけ注目浴びてるってことの裏返しだね。良くも悪くも。あと何だっけ？ ああ “女癖が悪い” だっけ？」

わはは・・・と彼女は笑った。

「水浴びをしたらエセルを借りるよ。」

「我を呼びつけたな。」

不意に声がしたと思ったら、目の前に輝く人が立っていた。横には知った顔が。

「どこからっ！」

「用は何だ、クリフォード王。」

男か女か、どちらともとれる中性的な顔立ちに、漆黒の髪と瞳。すぐにランバードが言っていた“愛し子”だと解る。

「不敬だろう？」

そう叫ぶと、初めてこちらを見た。何の感情も籠っていない、物を見るような視線。そんな視線を不躰に向けられるのは初めてだ。

「王太子殿下でいらっしゃいます。」

知った顔：エセルがそう言くと、「あ？そう。」だけで流されてしまふ。

「クリフォード・フォン・デ・サージェス。会いたいと言っていた要件は何だ、と聞いている。」

そして無視。

「い・・・愛し子殿か？」

「いかにも。・・・ああいらぬ事をしない方がいいぞ、怪我をする。」

言った時には遅く、侵入者に慌てた衛兵と魔術師が攻撃した後だった。

「・・・遅かったな。」

信じられない光景が目の前に展開していた。

9 「代償は払って貰うから。」（後書き）

次話、ちよこつと戦闘です。

10 「お前のだ。」

「ば・・・馬鹿な！」

結果を目の当たりにし、驚愕に慄いているのは二人を除いたその場の人間たち。

二人、とは愛し子とエセルだ。愛し子は澄ました顔をして、言ったのに・・・と言い、エセルの方はまるで日常とでも言いたげな表情をしていた。

「お前とお前、鍛錬をして居らん、精霊が弱っている。取り上げるぞ。それと、この中で一番筋がいいのは白のお前だ。精霊の成長が著しい。鍛錬を増やせ。・・・衛兵に至っては、ミハが泣くぞ。何だその鈍らな剣は。それじゃ誰も守れん。」

彼は一人一人にそう言いながら視線を投げる。

「それと我に攻撃するな。危険だから、お前たちが。」

バタバタと足音がして警護の人数が3倍ほどになった。

転がっている仲間を見て、さつと身構える。

『やめろ！』・・・そう叫ぶはずの声は誰にも届かなかった。比喻でも何でもなく、事実、声が喉からでなかったのだ。口は開くがパクパクと馬鹿みたいに開くばかりで、声が一言も漏れないのだ。

「エセル。素手でな。できるか？」

「やれます。が、魔術師は？」

「何も出来ん。我が封じた。術を繰り出すどころか指一本動かん。・・・参る！」

二人の声だけが鮮明に聞こえて、二人が目の前で背を向け合う。

「我が5人。エセルはそっちな。」

言いながら、にやりと楽しそうに口許だけで笑った彼は、斬りかかって来た衛兵を視線に捕えた途端すつと無表情になつてその懷に飛び込んだ。その速さについて行けず、長剣を振るうことが出来なく

なつた衛兵の足の甲を思いつきり踏みつけ、上体が落ちた相手の顎下に拳を突き上げる。

「私の方が少ないのでは？」

エセルの方も剣をすれすれで避け、素早く衛兵の背後に回ると、その首の後ろを掌刀でたたく。これで二人沈んだ。

「遠慮しろよ、久しぶりに暴れてるん、だ！」

と”だ”のところで、その長い脚を利用しての回し蹴り。衛兵は部屋の隅まで吹っ飛んだ。

背を向ける形になった彼に隙ありとばかりに斬りかかった相手に、彼は振り向きざま拳を顔面にめり込ませ、倒れかかる身体を殴り倒した。流れる様な体術で、次の相手を視界に捕えた時、見たこともない技にびっくりする。そのまま背負って投げたのだ。彼より遥かに大きい相手を、容易く、その細い背に背負い足を引っ掛けて投げ飛ばした。もう一人・・・、

「何だお終いか？不甲斐ない。楽しくない。」

彼が構えていた腕を下ろしてそう言った先には、剣をぶるぶる震わせているだけの新人が立っていた。もちろん、エセルの方も終わっている。

王の執務室には、衛兵たちの呻き声とノビた身体、落とした剣が散乱していた。

「・・・えらくご歓迎だな、クリフォード。それとも、この国では招いた客を切りかかってもてなすのか？」

冷えた声が響いた。

「そん・・・。」

言いかけると、今度は声が出た。

「我は最初に言つたろう？」呼び付けた”と。”用は何だ？”とも言った。クリフォードも“愛し子殿”と言つたな。だったら我の身分は解つていてこのもてなしなのだろう？」

怒っているのか、と顔を見ても至って無表情で感情が読めない。

「しかし、いきなり・・・。」

「我以外で、それが出来る人間がこの世界にいるか？考えれば自ずと解ることだろう？」

馬鹿にされた、とかつとなった。

「不敬は不敬だろう！ここは王の執務室であり、こちらにいるのはこの国の王だぞ。」

叫んだ。

その時、入ってきたマーカスが、まずそんな顔をした。

「不敬」か？ 我はこの国の人間じゃなし、家来でも下僕でもない。なぜ敬意を払わねばならん。」王の執務室”とは言うが、こんな穴だらけの結界に何の意味がある。それに我は呼ばれたから来た。日にちや時間の指定はなかったから、暇を見てきたただだが？ ああマーカス、久しいな。」

王太子である自分をスルーして宰相のマーカスに微笑みかける。

「お久しぶりでございます、愛し子様。お越し頂けて嬉しく思います。これはこちらの手落ち。申し訳ございません。」

深々とまるで王にでも頭を下げる様子でマーカスは礼を取ると、倒れている部下たちを運び出すように指示をする。王である父は、やっと驚いた表情を顔から剥がして彼にソファを勧めている。自らが立ち上がり、頭を下げている。

「クリフォード。パウロから預かり物があるぞ。妃にだがな。採れたての果物だ、身体にいいと。」

どこから取り出したのか、さつきまでまるで手ぶらだったのに、その手には袋が持たれていた。

エセルが彼の斜め後ろにそっと影のように立つ。

「父上！」

「控えろ、私が呼んで来て戴いたのだ。あまりの展開の速さについて行けなかったが、こちらが悪い。お前も頭を下げよ。」

よりによって自分に頭を下げる、と？ 王太子である自分が？

あんまりな言葉に、憤って部屋を出て行こうとした。

「殿下！」「アッシュフォード。」

マークスと父の声が重なった。

「思い上がるなよ？」

静かに彼の声が響き、振り返って思いつく言葉をそのまま口から零れさせた。

「俺は王太子だ。何故どこの誰とも解らん怪しい奴に頭を下げなきゃいけない？　そもそも愛し子など、神殿の作り話じゃないのか？　あの神官長は少し思いついてるんじゃないか？　見えない精霊など信じられるか！　うそくさい。大体精霊に何が出来る！　父上も父上だ、ちよつと母上の身体の調子がおかしいからって気弱になつてこんな奴を頼ろうなどと。」

「クリフォード。妃をここへ運ぶぞ。」

彼が立ち上がつて父上の了解を取る前に、ベッドごと母上が執務室に現れた。母上は知っていたのか、慌てずベッドから降りて彼に頭を下げようと……。

「フローレンス、いい、そのままだ。……ああ絡まっているな。それでは腹の子もお前も苦しかろう。我が取つてやるから。」

そう言いながら、母上の身体に触れるかどうかという感じの距離感で手を動かす。その動きを見ていると、何やら細い紐らしきものが母上の身体に絡まっているようでそれを手繰っているという感じだった。それを何度か繰り返すうち、不意に彼の手の中に黒い紐が現れた。

「それは？」

「これか？　これはな、情念だ。嫉妬やねたみ、羨望といったモノの塊だな。妃が苦しくて熱を出していたのは、これが身体中に絡まっているからだ。腹の子にもな。消滅させることもできるが……面白いものを見せてやろうと思つてな。わざわざ手繰っている。」

しばらく待てと言いなから彼が手繰っていると、どんどん母上の顔色が良くなつていく。

「楽になつて……。」

「そうだろ？ 良かったな。確かにこれは人間の医者では治せんな。フローレンス。」

彼が紐を束ねているのとは逆の手で緩やかに母上の頬を撫でる。

「その子を大事に育てよ。出来れば教育係はマークスが いいが、出来ぬだろうからマークスが選んだ相手をつけよ。ただし身分を問うな、貴族から選ぶ場合は十分吟味しろ、その子は重要な子となる。

育て損なうと、この国はなくなることになるぞ。隣のようにな。

甘やかすな、上に立つ者として何を行えばいいのか解る子に育てよ。思い上がらせるな、間違わせるな。我がこの国を消したくなるような子に育てるな。解つたな、フローレンス、クリフォード、マークス。」

「……はい。……」

と3人は頭を下げた。

「それと医者だが……今いるカリストは外せ。あれは出世欲ばかりで役には立たん。頭はいいが応用が効かない。ああ悪い、お前の同級生だったな、エセル……。引退したガゼブが一番良かったんだが、今は孫に囲まれて幸せに暮らしているしな……。マルセイヌ・ルシフォーがいい。」

出て来た名前にピクリと反応してしまう。彼女は……。

「北部で夫が死亡したから、帰つてきている。たった1年ほどの結婚生活だったな。……で、これだが……。」

ついつと引くと、廊下からがたがたと引きずられてくる音がする。それはどんな大きな音となつて、しまいには扉のすぐ外で打ち付けられるようになっていた。扉にぶつかっているのだ。そして声。彼がふつと指を動かすと、扉が開かれ入つてつかひ引かずられてきたのは……。

「カリスト。それに……。」

妾妃のイメルダ、イメルダの侍女の女官。

「いったい・・・あの・・・」

何で自分たちがここにいいのか解らないといった顔をして、3人は茫然としている。当たり前だ、こちらとて驚いている。

「これが・・・」

と彼が一本の紐を強く引く。すると、グンツとイメルダが傾いだ。

「彼女のだ。いわゆる嫉妬だな。立場上いたしかたない感情だろうが、元々クリフォードは乗り気ではなかったろ？この際下がらせてはどうだ？彼女ならば今だ若いし美しい。嫁の行き手はあるだろう。侍女は、まああれだな。主が不遇なのは王妃のせいだと思っているのだ、ねたみだな。王太子以降長く子が出来なかったのに、自分の主が来た途端の妊娠、王の渡りは一度もない。主大事の気持ちゆえ、だな。カリストはこの機に一気に頂点に上り詰める気ででもあったのだろう？王妃の主治医として他の医者を出し抜いてな。彼にとつては王妃やその腹の子は金の成る木な訳だ。しかも名誉も地位も引っさげて来る。」

彼の言葉に、3人はそれぞれの反応を見せる。

俯く者、無礼だと叫ぶ者、真っ赤になって怒っている者。が、

【浄化・削除】

彼が凜とした声で聞いたこともない言葉を唱えた途端に3人はその場に倒れ込んだ。

「・・・っ。」

「気を失っただけだ。誰か運んでやれ。」

彼の腕にはイメルダが、エセルの腕には侍女が抱き留められていた。カリストは倒れるままに放置だったらしい。男女差が激しいな。

マーカスの指示で3人それぞれに運ばれてゆくを見送った父上が母上に「すまなかったな。」と謝っている声が聞こえてきた。配慮を怠った、と。「解っております。」と母上はいつもの優しい笑

みで返している。

政略結婚であつた二人は、それでも時間を掛けて話し合い解り合いの時を紡いで自分が生まれた。子の目から見ても、政略婚だとは思えないほどに仲がいい。

15で当時23の父に嫁ぎ17で自分を生んだ母は、38の今21年ぶりの妊娠中。

「カリストはともかくとして、イメルダを責めるなよ。あの娘は好きな男がいたのを父親の出世欲の為だけに嫁がされてきたのだ。侍女にしてもそれを知っていて、ただただ主を守りたい一心なのだ。少なくともイメルダはクリフォードの渡りがなくてほつとしている。」

「しかし下がらせるとなると・・・。」

マーカスは言いにくそうにしながらもこう言つた。

「王の下がり」としての肩書は付いて回ります。確かに姫は若く美しいでしょうが果たして結婚となると・・・。貴族社会の口さがない者たちの噂の餌食となりませんか・・・?」

尤もな意見だつた。過去そういう噂が元で田舎にひっこんで一切出てこなくなつた者、自害して果てた者などがある。

「大丈夫だ。イメルダの想い人は案外近くにいます。そして王の渡りがなかつたことも知っている。あらぬ誤解をすることはない。父親には叱られるだろうが、彼が申し出ることによって、二つ返事で嫁に出す。噂のついた娘の取り扱いに苦慮した父親はもう手を挙げて今度こそ娘を彼に嫁がせる。愛する男が信じて傍にいてくれさえすれば、女はどんなことにも耐えられる強さは持っている。そうだろう? マーカス。」

それは、マーカスの家の事情も解っていると暗に言っているようなものだ。

「ご存知でしたか。」

エセルが言つと、

「“見える”からな。」

彼はそう返して、マーカスを見つめた。マーカスはふつと大きなため息をつくにつこりと社交辞令ではない笑顔を浮かべ「すぐに手続きに入ります。」とだけ父上に伝えた。

「任せる。」

父上の言葉に、部下たちが動き出した。

「愛し子様、そのあと1本は・・・。」

そう、彼の手にはあと1本紐が握られている。母上の言葉に彼はついと自分を見た。

「これが一番愚かで厄介な人間のだ。」

言っと思いつきりその紐を引いた。と・・・、ガクツと身体が揺れ、膝を床に着いた。

「アッシュフォード・フォン・デ・サージェス。お前のだ。」

10 「お前のだ。」（後書き）

次回、隣のあの国の惨状を目の当たりにします。

11 「加護を取り上げる。」

「”精霊に何が出来る”とほざいてたな。」
怖いくらい静かな声にびくりと顔を上げる。

【転移】

視界がぼやけたと思ったら、王城の裏の丘に来ていた。

「フローレンス、お前にはきついだろうが、お前が学習することは腹の子も学習する。親の務めだと思えよ。」

何をする気なのか説明する前に母上にそう言っていると、母上は、

「いえ、先ほどのことですから身体が軽くなって、久しぶりに気分がいいのです。それに私も知りたいのです。この世の理を。」

と、微笑んで頭を下げた。そうか、という感じで彼はそちらへ肯くと皆へ向き直る。

今この場にいるのは、父上と母上、自分にエセル、マークス。そして数人の護衛と魔術師、そして主だった幹部の貴族たちだ。貴族たちは今まで執務室の隣で会議中だったのを、そのまま一緒に連れてこられたらしい。

「アッシュフォード。お前が思っていることは少なからず加護付きではない奴は思うことだろう。それを何というか知ってるか？」

「知らん。」

「馬鹿だな。」

「馬鹿ではない。」

「エセルよりは馬鹿だろう？何一つ叶わなかったくせに。」

「……っ不敬だ。」

「二言目にはそれしか言えん馬鹿だからこんな紐を生みだすのだ。」

「何だっ！」

「真実だ。認めよ。そこからしか人間は強くなれん。」

「それは・・・。」

言い返す自分に彼はため息をつく。それがいかにも小さな子供の我儘に対する感じのもので、胸の中に情けなさが広がってゆく。

「まあ、いい。今から見せてやろう。お前たちが軽く見ている”精霊”が何をお前たちに与えてくれているかを、な。」

【範囲結界】

私を中心に半径100mの範囲で結界を張った。それは空も地中もだ。

エンヤ アルファ ユファ オーズ アーリー テス アーク
協力してくれる？

7精霊王を呼びだした。

今この中にいる者は私を除いて30人ほど。その中に加護付きは5人。その5人にはうつすらと精霊王たちの気配が解るのだらう・・・自然と膝が折れている。

「今、王たちを呼んでいる。姿が見えないのは不便だらうから、見えるようにしてやろう。もちろん聞こえるようにもな。」

みんな姿を強化してくれる？

言うと、

『お前の心のままに 詠星 』

私の名前以外は聞こえるように調整した声は、皆に届いているようだった。そして、皆の顔に広がる驚愕。

恥ずかしいだらう！

7人が私を丸く囲むようにして傳えているのだ。そりゃ驚くよ。だって”精霊王”だよ”王”。

（やーめーてー・・・）

恥ずかしがっても極力表情は変えないようにしつつ、皆を見回す。

『何を望む？ 詠星 』

加護を取り上げる。

そう宣言して、アーリーに向き直る。

「結界内限定で加護を取り上げて、アーリー。」

『御意に 詠星 』

アーリーが光を発すると、それが収まった時には傍にあった池の水がどんより曇っていた。透明度がなく、まるで毒でも含んでいるかのように底が見えない薄汚れた感じの池。そしてそれに続く川もまた同様であった。しかしその先、結界を出た後の川は本来の輝く透明な水の流れのまま。

『飲み比べてみるといい。』

人々にアーリーが言う。皆それぞれに手で水をすくって飲み比べる。その味の違いに、後から結界内の水を飲んだ者は吐き出していた。

『不味いと感じるのは、その水の中に栄養素が入ってないからだ。

水はただ水なのではなく、その中に見えない栄養を蓄えそれを飲む者に与え、また植物へと受け継ぐ。私は水の監視者、加護を取り上げればむろん雨も降らせない。池もそのうち枯れるだろう。』

そう言つてアーリーは消えて行った。

「アーク、お願い。」

言つとアークはにやりと笑つて私の手を取ると、その甲に温かい唇を押しあてた。

（何すんだ・・・）

こっちが恥ずかしがっていると解つてての、悪戯つ子的な笑みを浮かべつつ。

『承知した 詠星 』

アークが肯いた途端、ちよつと離れたところにあつた木が倒れた。
『僕は大地の監視者。さつきアーリーが水分を抜いたところに僕が加護を取り上げたせいで地面が木を支えられなくなったのさ。触つてごらんよ、さらさらした砂みたいないな地面だろう？加護と水分が抜けてしまえばそうなる。木どころか植物さえ育ちはしないよ。』
じゃあねえ・・・と言いながらアークも消えた。

『次は私か？』

「テス、ごめんね。」

『いいや、何よりお前の頼みだ。馬鹿がいると大変だな。我の加護を取り上げよう。』

言つた途端だつた。結界内に態と含ませた森の一部の木々たちがシユシユウ・・・と音を立てながら枯れて行つた。枝が落ち、木が倒れて、腐つて砂のようになってゆく。

そしてテスの足元からススス・・・と地面の芝が枯れ始め、結界内に緑がなくなった。

『我らの 詠星 を罵つた意味を知れ。 詠星 が許さなければ、

お前たちは隣と同じ目に会うことになるぞ。』
言い捨てて消えた。

テスが一番怖いと思うんだ、7人の中では。

『そうだな、あ奴はめつたに怒らんからの。その分怖いの。では我か？』

「うん、お願いエンヤ。」

『可愛いのを 詠星 だがしかし・・・フローレンス。』

エンヤは王妃に近づいて行く。そしてそのお腹に手を翳しつつ、小さく呟いてから顔を上げた。

『腹の子に触る故、一時的にその子だけは加護で結界を張つたぞ。・・・我が加護を与える予定の子ゆえな大事にしてもらわねばならん。その子が人為的にでも殺されたら我はこの国ごと燃やしかなん。』

恐ろしいことをにつこりと笑いながらいい、皆に向き直る。

『我はエンヤ。炎の監視者。我が司るは炎のみに非ず。お前たちがあるのが当たり前だと思っっているあの火も我のモノ。よって…』
太陽を指さしてエンヤが宣言すると身震いするほど寒さが押し寄せてきた。

『我が温めた空気も冷える。死ぬまで凍えて我が身を省みる。』
いいながらフェードアウト。

「オーズ。」

『何だい、俺は最後かと思ったよ。だって俺が加護を取り上げると確実に死ぬぞ。』

そうなんだよね、だって大気だから。だから…。

「一瞬でいい。それでフローレンスのみ除外してほしいの。」
だって子供に酸素がいなくなっちゃう。

『なるほどな・・・楽な仕事だ、承知した 詠星 』

『俺は大気の監視者、オーズ。今から加護を取り上げるが心して受けよ、愚かなる人間よ、パニックになるなよ。』

言ってフローレンスの背後に回る。

『よく見ておけ。お前が逃れることが出来るのは、腹に子がいるからだ。それがエンヤの加護付になることが決まっているのと、 詠星 の優しさだ。』

途端に皆が喉を押さえてのたうつ。

そりゃそうだ。

だって空気がないんだもん。苦しいよ。でもね1分くらいは息は止められるし。まあ前置きがなかった分吸い込んで息止めてって感じじゃなかったから不意打ちで苦しさ倍増だと思うけど。

『解除・・・ 詠星 を怒らせるな、俺たちの兄弟であり父を同じくするものであることを忘れるな。』

最後のちょん・・・とフローレンスの周りに張った結界に触れてパチンと壊してから消えた。

『最後は俺たちか。』

ユファとアルファが左右に並ぶ。

「うんちよつと特殊でしょ。長い時間がなければ分からないからだから。」

そう言つて二人と手を繋ぐ。

『人間たちよ、俺たちは昼と夜の監視者。その意味が解るか？』

マーカスが口を開く。

「まさか…時が…。」

『そう、流れることのない永遠の時間の狭間に落ちる。俺たちの加護がなくなる時それは時間が止まる時だ。もちろん加護を取り上げるのだから一番最悪の時間に、だ。見るがいい、我らが加護を取り上げた一番新しい場所だ。』

皆が立つ空間を小さく纏め、半径10mほどにしたものを飛ばした。

リンドル王国 首都ドートル

昼と夜のこない空間と、普通どおりに昼と夜が来る空間が並び立つ国。

その間には直径10？ほどの壁が立っている。不可視の壁だ。内側…つまり王城と貴族街からは外は見えるし音も聞こえる。庶民たちが暮らす外側からは中を感知することはできないし、そもそもそこに“ある”ということを知覚することは出来ない。

テスの加護を失った内側と加護溢れる外側。そしてそれを見せつける様な壁。テスの怒りの深さと怖さが浮き彫りになっている。

『俺たち精霊は、お前たちのように子を成すことはない。その分加護付きに対する気持ちは深い。それこそお前たち人間の愛情などにも負けないほどな。永遠の時を生きる俺たちにとって、お前たちの命など一瞬に等しい。その中で加護付きの成長を見守り死ぬのを看取り、また輪廻で還ってくるのを待つのがどれほどのことか解るか

？テスの目の前で殺された加護付きは280年ぶりに還ってきた魂だった。しかもテスのお気に入り、精霊をつけてやる場所だった。加護付きが死ねば、それに付く精霊もまた消滅する。テスは目の前で二人の子を殺された。目を抉られ踏みつけられ四肢を裂かれた遺体にテスの叫び声で俺たちはみな呼びつけられた。”殺しても足りない”とテスが言うから、こうしよう、と提案したのは俺たちだ。永遠に俺たちの“檻”の中へ。テスの怒りが収まるまで、永遠に。」

そこには幽鬼のように壁伝いに彷徨っている人間たちがいた。壁の向こうを羨ましそうに妬ましそうに絶望の瞳で見つめながら、時々壁を叩いては絶望したただ歩く。穴や壊れているところはないかと思いつきながら歩いているのだろうか。

「他国に逃げた貴族や王族、すべてがこちらへと戻されている。何も知らずに働いていただけの人間は逆に全員出した。この中の人間たちは知っていて何もなかった者と一緒になつて贅沢をし国を疲弊させ、民を苦しめたもの。皆罪のあるものばかりだ。国自体が苦しんでやっと生まれるはずだったテスの加護付きを失くした罪は全員で払ってもらふ。王城内で蓄えた食糧が一番尽きた時を見計らつてユファとアルファの力を発動させたんだ。飢え、苦しみがいたところで、テスの加護がない故植物は育たない。また二人の加護もない故時間が動かないから芽すら出ない。殺し合つても死にはしない。傷は出来るけどね。自殺も出来ない。」

「.....」

ユファがアッシュフォードの頭を掴んで、目を反らせないようにする。

『我らの加護なしでは生きてゆくことすら出来ぬお前たちが、俺たちの愛しい加護付きを愚弄することは許さん。お前が愚弄したパウロはな父自らが選出した選ばれた魂だ。死して3度の転生を繰り返しつつ善行のみを行い、父自らが名を与えて来た稀有な人間だ。お前などより余程価値がある。それを一歩間違えば自らの国をこのような目に合わせるはずだったお前がこの口で語るな。』

「しつて・・・。」

『当たり前だ。俺たちはいつもそこにいる。何時いかなる時も。お前がエセルを罷免しようとした時もパウロの忠告を一笑した時も。』

”今は北部よりも自分の地盤を固めることが先決だ”などと、貴族に根回ししていた時もな。そんなに腹の子が怖かったか？自分の地位が奪われるかもしれない？お前とあのカイロスの立ち位置は同じだと気付け。』

目の前に曝されているのは3年たった今も死んだばかりのように横たわっているかつての隣国王太子カイロスの姿。両目を抉られ、身体中の骨が潰れているのであるうべしやんこになった姿に深々と剣が刺さっている。

「クリスが死んでいたら、次はお前たちの国だった。クリスがパウロにひそかに保護されていなければね。クリスとパウロとクリスに付いている精霊に感謝しろよ。精霊は主であるテスがどれほど怒るか知っていたから、必死でクリスを庇って逃げ出したんだ。戦火の中、まだ6つのクリスを隠しながら隣町まで。」

11 「加護を取り上げる。」（後書き）

さて、心を入れ替えますでしょうか。

12 「王」とは？」

落ちくぼんだ目、痩せて骨と皮だらけになった腕や首。着替えや風呂などといった余裕があるはずもなく、汚れ皺だらけになり、よれよれになったドレスや服。そんな姿でまるで生きた屍のようにゆっくりうろつく姿。

「カイロス様・・・恨みますわ・・・。」

そう呟きながらへたり込んでいるのは、比較的まだ綺麗な格好をしているカイロスの妻であった女だ。それでも謁見に来た時とは比べ物にならないくらい疲れきっている。

「愛し子様、あの赤子はいかがなされたのです。」

そう言えば、と思い出す。取り出して掌に浮かんでいたあの赤子。弟王子との子だと言っていた哀れな子。

「腹の中に返した、成長することはないがな。時が止まっているんだから。・・・しかしおそらくはもたないだろうね。ユリアは遠からず狂うよ。」

恐ろしいほどに彼は冷静だった。自分や他の人間は目の前の光景に動揺し、恐れ慄いて、一つところへ縮こまってしまっているというのに。

「あの愚かな男は、輪廻の輪から外れた。魂を浄化するところか生まれ変わって償いをする機会も謝る機会も何もかもを奪われ、今は虚無の海に漂っている。あの男の頭上では、生まれ変わりの魂の列が進んでいる。それを下から見上げながら永遠に苦しみもぐ。そこには知った顔も通りがかるかもしれないが、男は一人だ。たった一人真つ暗な波のない底のない海に浮かんでいる。意識を失うこともなく死ぬこともなく、ただただあるはずのない許しを請いながら。」

静かな声にその光景を想像をする。おそらく皆がそうしているであろう。「哀れな。」と小さく呟いたのは誰の声だったか。

「どうすれば、許される？」

カイロスの遺体に視線を投げたままアッシュフォードが呟いた。

『悔い改めて、祈れ。』

『心からの祈りを捧げよ。』

『俺たちに届くのは心からの真実の気持ちのみ。』

ユファ神とアルファ神が口々にそう言った。

「精霊は嘘が”見える”んだ。だから、本心から悔い改めねば嘘の言葉になる。嘘の気持ちと言葉を並べたところで、人間ならば騙せても精霊は騙せん。」

それを難しいと思う人間は、悔い改める気がないんだろうね、と。城の中から物を壊す騒々しい音が聞こえてくる。

『馬鹿皇子だ。癪癪を起してる。そろそろ来るよ。』

ユファが言くと、剣を携えたノースが血走った眼つきでぶるぶる震えながらやってくると、兄であるカイロスの遺体に斬りつける。凶器に取りつかれたその行動は何度も繰り返される。「あんたが・・・あんたのせいで・・・！」と呟きながら。

そしてぎらついた目がユリアを捉えるとつかつかと歩いて来て、その細い手首を掴んで引きずるように部屋へ戻ろうとしている。

「嫌！ノース、いやっ！・・・はなし・・・。」

「黙れ！股を開くしか能がないだろうが。来るんだ、そして啼いてる。」

本当に引きずられてユリアは城の中に戻されて行った。叫び声だけが聞こえてくる。でもそれはユリアだけでなくあちこちから、男の声も女の声も。

そこには救いはないように見えた。透明な壁一つ挟んだ街が眩しいだけに余計にそう見えた。

街の様子はすっかり立ち直っていた。

3年も経っているのだと改めて思う。

かつては、”通りの真ん中は貴族専用”とか法律のあった石畳の立

派な通りは、今は両脇に小さな店が立ち並び、人々が明るい顔で買い物をしたり立ち話をしたりしている。

「来るぞ。」

彼の指さす先を見る。そこに現れたのは3人ほどの男たちだった。他の街人と何ら変わらない、普通の格好をした、しかし屈強な身体つき。ミハイル隊長が3人といった感じが。

「あれは・・・リーヴェ副官？」

マーカスの声に王がそうだと小さく言った。

「リーヴェ・クリストフ。今や新しいこの国の英雄だ。お前らは惜しい人材を逃したな。なあ、マイルズ？」

彼が振り返ってマイルズ公爵を見た。

自分が副官になる前、その地位にいたのは今目の前で人々と親しく話をし、手を貸し街と一緒に復興しているリーヴェだった。

リーヴェは獣人の父と人間の母親を持つ獣人で（父親が獣人の場合、母親が誰であっても必ず生まれてくるのは獣人だ）、ミハイル隊長が格闘系に特化しているのとは違い、俊敏性に特化した身体つきと瞳に縦に伸びる瞳孔が特徴だ。

「隣にいるのはリアクロス国の魔術師ランド、テスの加護付きだ。

反対のはランドの双子の弟であるテイル。3年前に彼らはここで出会い、気持ちを重ね合わせ、街と人を守るために先頭に立って戦った。テイルの片腕がないのはその時負傷したためだ。彼らに賛同し、各国からかなりの人材がやってきた。皆仕事を辞め、彼らと共に戦っている。かなりの人間が犠牲となり、また負傷した。リーヴェは妻の家族がここ出身だった。どうか助けを出してほしいと訴えた時、マイルズお前は何と言った？」

「何故態々首を突っ込まなければいけないのです。それよりはむしろ逃げ出してくる難民を入らせないよう国境を固めるべきです。あの国はなるべくしてあんなった。救う必要はない。」

謁見の間に木霊するほど厳しい声がした。

「そうだ。以前からあの者たちの態度は目に余った。結果、どこの国も助けに入らないではないか。」

そう同意したのは王太子である俺だった。

その後すぐ、リーヴェが騎士団を辞めたと聞いたが、何とも思わなかった。いや、馬鹿な奴だと思った。

「確かにリンドル王室の人間は腐っていた。が、それが民を見捨てる理由になるか？むしろそんな奴らに苦しめられているのを助けようとは思わなかったか？ お前たちは知らないだろうがな、他国はさつさと助けに入ったのだよ。あからさまに国旗を掲げて入ると国と国との戦いになる故、”傭兵”という立場でしか入ることは出来なかったが、それでも正規軍がかなりの数入っていた。皆罪のない民を救う為に他国の為に。お前たちが王宮で”救う必要はない”と断罪した国のために戦っていたのだ。サージエスの北部が狙われたのは、その時お前たちが参加していなかったからだ。あの国ならば易々と入れると思われたからだ。他の国は絶対に許さないという意気で戦っていたから、報復が怖くて襲われなかったのだ。つまりは・北部の虐殺はお前のせいだよ、アッシュフォード。北部の人間が何人死んだと思う？クリス一人しか残らないほどの虐殺を許したのはお前がパウロの忠告を王に伝えなかったからだ。”そんな事があるか？””その話に信憑性はあるのか？”と他国の介入の話を調べもせずに一笑したお前が、北部の人間たちを、殺したんだ。アッシュフォード。」

一言一言を切るようにして述べられる自分の罪に、足が立っていられず崩れ落ちる。石畳だと思った地面は、元の王城の裏の丘に戻っ

ていた。

「お前がつまらぬ嫉妬をしてエセルを遠ざけていなければ、学友時代に腹を割って友人になつてさえいれば、こんなことはなかったんだ。」

”エセル”？ 何故？

「加護付きには、同じ属性の精霊の声が聞こえる。エセルはテスの加護付きだ。殺された赤子と同じ属性だからな。いち早く察知出来ていた。だから進言しにきたろう？ リンドルにテスの加護付きが他に一人もいなかったとは考えられない。だったら更に多くの声が聞こえたはずだ。それこそ魔される位な。何度も訴えたはずだぞ、エセルは。それをつまらぬ嫉妬心から相手にしなかったろう？ お前は愚か者だ。馬鹿だ。甘やかされるばかりで、努力をすることもなく他人を羨んで遠ざける大馬鹿者だ。」

「俺・・・は・・・お、れ・・・は・・・。」

茫然として自身を失っているアッシュフォードをそのまま部屋へと転送し、貴族たちには散々静かに脅したのち帰らせ、そして執務室へ帰ってきた。

「愛し子様・・・あれは、私たちの罪でもある。」

かなりの精神を疲労したのであるう妊婦の妃は部屋に返した。今いるのは私とマーカス、王とエセルだ。

「そうだよ。お前たちの責任でもある。甘やかして育てた馬鹿がつく親だったお前たちのな・・・それでも矯正する機会はいくらでもあった。子は成長する生き物だ。そこでリセットさせれば良かったのに、付いた教官がマイルズではな。王、お前の人を見る目が甘かったのだ。確かにサージエスは平和が長く続いていたから油断も

あつたろうが、例え他の者がそうであつても王とその側近だけではそれでは駄目なんだ。」

彼は息をつき、窓の外を見ながら夕陽を背負つて話し続ける。

「王」とは何だ？ クリフォード。」

「民と国を導く者、です。絶対的な力を行使し、国を守るものです。私はそう習いました。」

クリフォードの答えは一応及第点だろう。」王」を知らない私が言うのもなんだけど。

「自分はね、」すべてを背負う者」だと思っている。」

一人称を“我”から“自分”に変えることで、少し肩の力を抜く。元々人間の私にとつては、さっきの光景はかなりショックだったんだ。一応女の子ですからね。現代人だから、戦争も知らないし。かなり身体が強張っていたんだ。

皆が座つたのを確認して、自分も出窓のスペースに座る。行儀悪いけど。

「背負う者」ですか？」

マーカスが問いかける。

「うん。情勢が不安定で国が定かでない時は、先頭に立つて雄々しく戦う王の方が民衆は安心するだろうけど、平和になった場合、そんな王では逆に不安になる。」また戦争をするんじゃないか？」とね。考えてもみる。兵は元々民だろう？家族を戦争に取られて嬉しがる人間がどこにいる。」

「あつ」と三人が今気がついたという様子で息を飲む。そこが駄目なんだつて。

「最前線に行かされるのは、精鋭部隊と大抵民出身の兵だ。王族は出ないし、貴族どもは安全な後方にはかりいる。それで“戦え”と旗を振られてもな。皆家族がいて死にたくはないんだから。だから平和な時に入ったら、王は引つ込むのがいいと思うんだ。皆を国ご

と背負いながら、後方で”好きなようにやってごらん”と見守るのが王の仕事だと思っっている。出しゃばって、“俺が”俺の為に”とか“俺のモノ”だとかいらないんだ。静かに見守りながらちゃんと人を見て選んで、良き人材をあった場所に使うよう手配する。いったん対国となった時には、力強い王として出しゃばってゆく。それが王だと、ね。貧乏くじだと思うだろうが、そのために立派すぎる城に住んで、多くの税金を使わせてもらっているのだろうか？国は王の為にあるんじゃないよ。民の為にあるんだ。どんなに“自分が王だ”と叫んで威張ったところで、民が一人もない土地を“国”とは呼ばないだろう？ クリフォードが言ったが”絶対的な力”を“自分”の為じゃなく“民”の為に行使するのが王だと思うよ。理想論かもしれないが、平和だからこそ理想論が語られるべきだろう？

と語ってみた。キャラじゃないけど、必要だと思うんだ。民側の意見って。

だって絶対王政なんだから。周りは貴族ばかりだし、一般市民の声なんて聞こえやしない。

「精霊王たちは怒っていらっしやるのですか？」

この国が助けに入らなかったことを・・・と、陛下が問うと、「彼らは基本的に人間たちがすることに関知しない。視えているだけだ。でもそこに加護付きが巻き込まれれば、そうはいかない。言ったらう？加護付きが死ねばそれに付いている精霊もまた消滅する。それは仲間が消えるということだ。君たちは目の前で仲間や家族が殺されるのを黙って見ていられるか？答えは”否”だろ？」彼はそう返した。

皆が肯くと、

「そういうことだよ。命とは精霊であつても人間であつても同じくらいに貴いものだ。しかし、それをすぐに忘れるのは人間の悪いところだ。」個”の命は誰のものでもない、その”個”のものだ。国のものでも、ましてや王のものでもないんだ。クリフォード、忘れるな。それを忘れた時、この国は大きな厄災を喰うことになる。」許されることはないんだ、と彼は呟いた。

「神、とは・・・。」

エセルの呟きはマーカスに引き継がれる。

「厳しい方だということだ。優しさだけを受け取るのではなく、その厳しさもまた贈り物、ですか。」

「そういうことだ。」

「・・・さて、代償を払って貰おうか、クリフォード。」

12 「王とは？」（後書き）

く…暗かった。

13 「教えなあい。」

神殿の奥、神官長ですら許可なく立ち入れない場所がある。

「パウロ。」

そこに座す人影がゆつくりと立ち上がって振り返る。

漆黒の髪、向けられる迷いのな黒曜石の瞳。

「愛し子様。」

パウロは床に膝をつき、見上げた。

白い肌を惜し気もなく曝し、手が痺れるほどに冷たい泉に身を浸していた詠星は、薄い布一枚の姿でパウロの前に立つ。濡れた身体にその布は纏わりつき、いやが上にもその性別を露わにする。そして、「ご成長なされましたか。また力が上がっておいでです。」

曝した姿は、ここへ入った時より僅かに大きくなっていた。

身体の細さなどは変わらないものの、身長が伸びている。髪も伸び、肩辺りで遊んでいた毛先は、背の中央まで伸びている。手足が長くなり顔立ちも僅かに大人びていて、当初は10歳程度と思われるが、今は15、6には見える。それでも実年齢を考えると幼く見えるのだが。

（どうやら空気に馴染んできたらしい。）

と詠星は思った。

”この世界”の空気感に、人間であつたはずの詠星の身体が。

（それってますます人外ってことデスネ。）

複雑な心境ではあるが、ガイアスを自分の父と認めたあの時から、

“嫌”ではない。

（でもいいこともあるもんね。）

乾いた布に身体の水分を吸い取らせながら、自分の身体を改めて見る。

”電信柱”だの“まな板”だのと言われていた己の胸が大きくなっていることだ。

（どれくらいなんだろうね。これ。）

大学生になってまで胸が無きに等しかった故に、詠星は信じられないことにブラというものを着けたことがなかった。だからカップ数なるものを知らない。

「メアリーには遠く及ばないけど・・・。」

ぼそつと口にする、着替えを用意していたパウロが、

「あの子は特別大きくございます。愛し子様は一般的ではないかと、乏しい私の知識ではございますが。」

と言って、着替えを手渡してくる。

それに何と返していいものか・・・バサツと被るだけの服を着て、詠星は言った。

「いつものところにいる。」

【パウロつてばさ、好々爺って感じのくせして、意外と遊んでたりしてたのかな？】

久しぶりの日本語を語りかける相手は・・・。

【そうだな。今でさえあれほどのんだ。若いころはさぞやモテたろうな。】

真っ白な毛並みの獣。

マンモスほどの大きさの。

【いやあ～！生臭坊主？】

【それを言うなら神父だろう？ しかもここでは妻帯は許されているゆえ、“生臭”扱いは可哀想ではないか。】

長く大きく美しいふっさふさの尻尾を左右に振りつつ、背に乗っかっている詠星にそれは言った。

【突っ込まないでよ、言葉の綾でしょう？ つーか・・・魄も大きくなってるし。】

【うむ。主の力が上がった故我らの力も大きくなっておる。】

【それって魂も？】

【そうだな、我らは対故な。嬉しいぞ。】

【そつか、なら良かった。お休み。】
ふあわわあゝと欠伸をして、詠星は眠りに入った。

面会をさせてくれ、と申し出る人間は後を絶たなかった。

それこそ王族から貴族、庶民に至るまで様々で、その内容も「子供のどれに跡を取らせたがいいか？」だの、「うちの人はいつ帰って来れるのか？」など、拳句には「占い師ではないんですぞ。逆に不興を買ってしまわれます。」とパウロが追い返さなければならぬほど。

鉄壁な結界を張つてあるので、危害を加えようと思つてゐる人間は一歩たりとも神殿の敷地にすら入ることは出来ないが、逆を言えば敵意さえなければスルーである。

「ミハ エセル。」

「何です？」

鍛錬が終わつて草原にうつ伏せていたのをゴロンと空を見上げる様に態勢を変えて二人を見る。

ミハは私の横に座つていて、エセルはまるで見張りでもあるかのように起立したまま周囲に視線を飛ばし、精霊術で気配を探つてゐる。

「ここを、出ようと思う。」

そろそろ潮時ではあると思つていたが、このところの訪問者の数とそれに忙殺されているパウロが本来の仕事が出来ないほどだと聞けば、名づけ親の親心が疼く。・・・って、聞こえはいいが、興味を押さえられない。

元々面倒臭がりの割に、自分ひとりであれば結構活動的であつた詠

星にとって建物の中から出ないという生活を長くは続けられないのも道理だ。

「どちらに？」

「決めてはいない。が、世界を視ると父に言っ出て来たから。」
この世界で生きてゆくと決めた時、自分が護っていかなくてはいけない世界が、どんなものなのか説明ではなく自身の目で確かめたいと言い出したのは詠星だ。

それをガイアスは快く肯いてくれた。

行っておいで、詠星。

と。
君が護るに相応しいと思える世界かどうか、異世界で育った君だからこそ解ることもある。

それでもし疑問が生じたら、精霊王たちなり自分自身の力なりを使い、正すか消滅させるか決めていい、と。

それでいいの？壊しちゃったらどうする？

いいんだ。試行錯誤して創り上げていくものだろう？ここは元々我の力で成り立っているものだ。我は“神”だと言われているが、自分自身で“神”だと名乗ったことも意識したこともない。ただ生まれたのが何時かすら解らないが、存在したその時から、この力は“あつた”のだ。それについてしばらく考えたこともあつた。”なぜ力があるのか”、“なぜ我なのか”と。しかし答えをくれる者はいなかった。だって“我”は“我”のみなのだから。だったら、生かすにはどうしたらいいと考えたのだ。我は”生みだす”ことしか出来ん。だったら”生めばいい”とね。生みだされたものは創ったものというのは、何時かは壊れるか壊されるものだ。しかし我にはそれが出来ない。その為に精霊王たちを作った。守り、壊すために。彼らは我の息子たちだ。だったら詠星、貴女は我の娘だ。彼らと同じ我の力を持ち、しかし彼らと違い我と性質の同じ全ての力を持つ。貴女だからこそ出来ることがある、我はそれを反対する気も止める気もない。貴女は貴女らしくここにあってさえくれればい

いのだ。

そう言っていたガイアスの言葉を人間たちに教えることはないが、
”造る”ことのみにしか力を使うことが出来ないというのは歪なこ
とだ。必ず反対に作用するものが出てくる。それが“私”だとい
うのなら、“私”はこの目で確かめなければならない、と思うのだ。
世界を。

人々を。

その暮らしを。

「御一人で、行かれるですか？」

「うん・・・それはパウロにも反対されたんだけどね・・・まあ
今日会合があるだろう？それにちよつと顔出して他の国の神官長た
ちにも顔見せだけして、行くことは知らせておこうと思ってるよ。
でも誰を何人連れてどのルートから行くとかは教えない。まあ、抜
き打ちテストみたいな？」

というと、抜き打ちテストが解らなかった二人に説明をする。二人
は納得して肯いたのだが、ミハイルが、

「では連れて行く“誰か”は決めてるのだな。」

と鋭いことを言う。

まあ二人には見せてもいいか、と目の前に広がる草原に二人…とい
うか二匹を出すことにした。

【魂・魄】

突如空中から出現した二匹のものは、スタッと彼女の前に降り立
つと、その巨大な身体に似合った太い脚を折り曲げ彼女の前に従う
かのように身体を伏せた。

世界には沢山の獣も魔獣もいる。しかし、これは・・・。

真っ白の体躯に長い体毛、金の瞳に長い鼻面。大きく口が裂けたその顔は一見魔獣よりも怖そうだが、瞳には理知的な光が宿っている。もうひと片も同じ感じたが、色は黒。闇のような濃い黒だった。

「これ・・・は？」

驚きで声が途切れがちなエセルがやっとそれだけを吐き出す。

「“式”“式神”という。黒が魂、白が魄。私が幼い頃より傍にいる。・・・彼らと行くよ。」

（シキガミ）

耳慣れない言葉を時折話す愛し子ではあるが、また奇妙な神の名前を告げた。

「“それ”は・・・。」

ミハイルがそう言いかけると、

【“それ”とな？ お主、無礼な。】

黒い方・・・魂がそう言って大きな口を開いた。

【こら。その言葉じゃ通じないよ。さっき教えたじゃん。】

何と言っているのか解らないが、愛し子が何かを言うと、今度は白い方が口を開いた。

「お前”ミハイル”とか言ったな。我は気が長い方だが、これは気が短い。“それ”呼ばわりに怒っているぞ。」

と、親切にも教えてくれた。が、

「“これ”って何だ！“これ”とか“それ”とか・・・お主ら纏めて噛み砕いてやる。」

黒い方が怒って唸ると、すかさず愛し子が髭を引つ張った。

「やめて。ミハは友人なんだよ。・・・ごめんね、久しぶりに出てこれて伸び伸びしたいんだ。大丈夫だよ、口では何といっても彼らは強いから。そして日頃はコンパクトだし。」

「コ・・・？クト？」

「あ・・・ああ、いいいいよ。ごめん解らない言葉使って・・・。それよりミハとエセルには頼みたいことがあるんだ。留守中。」

“留守中”という言葉を使うということは、いつか“ここ”に戻ってくる気にいるのだろう・・・とそれだけで、ほっとする自分がいるのをおかしな気持ちで考えた。

「何ですか？」

「アツシユフォードを、ね。鍛えなおして欲しい。発つ前に挨拶には行くけど、腑抜けになってるんだ。ショックが強すぎたのかもしれないが、必要なことだったしさ。・・・私はね、“王”であるなら、綺麗なことも穢いことも、いや穢いことなら尚更他の臣下たちより知っておくべきだと思ったんだ。だって、解つててそれをやるように命令する立場だから。清濁飲み合わせて、それでも国民の前で、爽やかに笑ってられるのが“王”の仕事だと思ってる。」

仕事、ですか・・・と俺が言うと、

「そうだよ。”王”という役職の“仕事”だよ。個人のことを指す言葉じゃない。だって引き継がれてゆくモノだから。今はクリフォード、次はアツシユフォード。この国ではね。誰よりも辛く苦しく、それでも雄々しく大らかに笑っているのが仕事だよ。だからこそ尊敬を集め慕われる。愚痴を言う王なんて見たくもないし、飾りなら尚更いらないだろ？民にとって“この人がいれば大丈夫””この人に付いて行けば大丈夫”と思われる度量を持つ者が“王”だよ。出来ないなら、最初から継いじゃ駄目だ。後になって“やめた”が出来ない仕事だから、最初に覚悟を持たないと。一生臣下と民の前では仮面を被って生きてゆく覚悟を。決断をするなら、その責任と結果をすべて一人で負う覚悟をね。」

それを二人に持たせてほしいと彼女は言った。

「何故ですか？ミハイル隊長はまだしも・・・。」

「お前が学友で在り、心の底ではお前を必要としているし、好きだからだよ、アツシユが。」

信じられない！という顔をして彼女を見つめるエセル。まあそうだ

ろうな、とは思う。今までの態度が態度だったから。嫌がらせしかしてるのを見たことがないからな。

「だから。お前も“王太子”としてではなく、“同級生”として接してやって。・・・言つたろう？アッシュは甘やかされて育つてきたどうしようもないボンボンなんだよ。甘ったれで、意気地がなくて我儘で。」

「要するに“子供”だと言いたいのか、王太子に向かつて。」

俺の発言にびつくりした顔をしてエセルは慌てて周囲を見回すが、誰もいやしない、と肩を竦める。

「そうだよ。立場なんか関係ないだろ？“それ”は自身で自覚するものだ。そこから出発しなくちゃいけないのを、あのガキはしなかった。生まれた時から与えられて育つてきたために誰も教えてやらなかった。教えるべき相手はあの公爵だろう？保身と出世のことしか頭にない。あれは王のミスだ。クリフォードにもそう言っておいた。だから同じ歳でありながら自覚が出来るエセルと自他ともに厳しいミハに頼みたい。」

「わ…私は、そんな立場では・・・。そんな大それた・・・。」

「・・・といえるエセルだから、だよ。“己が無知であることを知る人間は馬鹿ではない。己の無知を知らない人間は馬鹿である”だよ。お前にはアッシュの逃げ道になって欲しいんだ。マーカスと共にね。正直本心を曝す人間が一人もいなければ、人は潰れる。綺麗事だけでは生きてはいけないから。“王”の仮面を脱げる場所がなければアッシュは潰れる。その場所になってやって。真夜中にグダグダ言いながら酒を飲む相手でもいい、執務室で悪態をつく時、突っ込みを入れる相手でもいい。その内、その仲間に王妃も加わる日が来るだろう。」

にやりと笑う彼女に、まさかと思う。

「・・・王妃の当てが？」

王太子は女癖が悪いことで有名だが、本気の相手は今だ一人もいない。秘めたる相手がいるのかすら。

「あるよ。でも教えない。」
にやにやとほくそ笑んでいる彼女は、とても楽しそうだった。

13 「教えなあい。」（後書き）

成長しました。約10?ほどですが。それでも小さい方です。

14 「準備と覚悟をして待ってて？」

「お邪魔します。」

そう言って入って来た人間を、皆は注視した。

漆黒の瞳と髪。白い肌に少年のような少女のような体格で、ランバードを見つけるとそっちへと歩いて近付いてゆく。

「おまえは……。」

「誰だ？」

という人々の声に

「パウロ。メアリー知らない？」

という言葉を重ねて無視。

その時、気がつくべきだった。ランバードを新しい名前で呼び捨てにしたその時に。

誰かが術を飛ばした。

「パァ・ン」という大きな破裂音がして、ああ吹き飛ばされたかと皆が思った時煙の中からその人物が一步出てきた。

何でもないという感じで、全然ダメージもなくそこに立っていた。

「バスクのミグリン神官長。それが精一杯か？そんなものでは我に傷一つ負わせるどころか、髪の毛一本吹き飛ばせんぞ。」

静かな声ながら、その威圧感は凄まじかった。

「ではこちらもお返しをしようか。」

口の端だけで笑った人物は、すっと手を翳すと、

【返還】

知らない言語で呟いた途端、ミグリンの身体から急速に力が引き抜かれて行くのが皆にも解った。それはミグリンの色を纏ってその人

物の掌に吸収されていく。

「い・い、や・・やめっ。」

ガタガタと震えながら呻くミグリンと、それを顔色一つ変えず表情すらないまま見つめながら、あろうことかまたランバードと話し出す。

「メアリーに大切な用があるんだ。お使い？」

「ええ、街まで行ってますが、もう帰る頃だと思います。大切な用とは何ですか？」

ランバードにしても至って普通だ。

「うん、ランバードにも関係するんだけどね、メアリーお嫁に出しちゃってもいい？・・・ああ、もう終わりだね。」

ずっと翳していた手を納めると、ミグリンはもう息も絶え絶えといった感じだった。

そしてその人物の掌の上にはミグリンの青を彩った頭ほどある球体が浮かんでいた。

「結婚、ですか？ミハイルですか？」

ランバードはニコニコ笑っている。うんと肯いて今度は指をくいつと曲げた。途端にミグリンの身体が浮かんでその人物の前まで運ばれる。

「いきなり人を攻撃するようランバードは教育しなかったろ？ 若いからって侮られないよう気を張るのもいいが相手を見て喧嘩を売れよ。死ぬぞ。」

視線を合わせてから、その球体をずっとミグリンに押し付けると、それは彼女の胸辺りから身体の中に取り込まれてゆく。“返すよ”と言いながら。

「大丈夫か？ミグリン。肩の力を抜いて、深呼吸をしながら力を意識して身体全体に行き渡るよう気を巡らせる。一気に入れたから気を失うぞ。」

と、ミグリンの額に触れてその揺れる身体を指一本で固定しているらしい。そこに来て初めて皆は気がついた。

「い、としごさま・・・。」

誰が呟いたのか、その小さな言葉が部屋に零れた。

「ああ、そうだ。　我が唯一神ガイアスの子“零”。」

「御名前を決められたのですね？」

パウロはそう言って席を勧めると、私の目の前に手ずから入れてくれたゾーイという飲み物を置いてくれた。これは地球で言うところのコーヒーにそっくりの味をしていて、コーヒー党だった私にとっては、非常にうれしい飲み物だった。

ただ…そうただこれって木の実なんだけど・・・なんだけどさ・・・変な形してんだよね。初めて見た時は即効消えたもん、その場からだって！！　だってよ、よりによって！

ああ、確かに嬉しかったさ。美味しいし懐かしいし。・・・小さい頃からいろいろと視えたり感じたりしてきて、あんまり怖いものがない私だって怖いもの、というか好きになれないものはある。

パウロがこうしてゾーイを入れてくれる度に、それを口に入れながら（でも飲むんです。だって美味しいから。）あれをつい思い浮かべるわけよ。

美しい緑の木の枝にびっしりと、そうびっしりとなっているゾーイの実。あの黒々とした艶のある・・・大きさといい光り方といい、よく似た地球の生き物、ゴ●ブ●をね・・・。

でも哀しいかな美味しいんだよね、また。

喰い気（飲み気か？）に負けるって人としてどうなんだと思うこともあるんだけど、まあ今更か？とか開き直りも必要だよね、だって異世界だし、精霊だし、神様だし・・・ってかなり現実逃避して、現

在に至つてゐる訳で。ついつい浸っちゃうわけなのよ、これが出ると。
「・・・うん。呼びにくかつたろ？それにほら、バレバレ感がちよつとね・・・だから。通称つて思つてくれていい。」

“創る”のがガイアスで“壊す”のが私なら、名前は単純に“零（0、ゼロという意味で“レイ”）“でいいんじゃないかと思つたんだ。ポチやタマよりまとまらうし。

「零様。先程は失礼を致しました。ランバード神官長より話だけは聞いていたのですか、よもや来て戴けるとは思つておりませんでしたので・・・。」

深々と頭を下げるミグリン。彼女は最近神官長を拝命したばかりの女性で、元はパウロの養子。何でよその国かというところ、この世界ではガイアス以外の神はいないから。つまり世界唯一神がガイアスなので、どの国もガイアスを信仰し、神殿も王のいる街の本殿はガイアス神で、あとの地方はそれぞれその土地にあつた精霊の神殿だったり（たとえば海沿いだと水関係でアーリー神の神殿とか）、でもどこの街にも大きさは異なれど神殿はあるんだと。

そしてそれぞれの国にたつた一人神官長が配属されている。これは転勤制があるらしくずっと死ぬまでその国、ということはないそうだ。それは特定の国や地域、王や貴族との癒着を防ぐためなのだそうだが、神殿や神官の立場は基本中立。どこにも属さず、誰の臣下でもなく。長は当たり前ながらガイアスで。

「用がね、あつたんだ。二つ。一つはね、さっきも言つた通りパウロの子、メアリーに求婚をしたいと申し入れがあつたこと・・・あとひとつは・・・パウロ。」

パウロをじつと見る。

「はい。」

貴方は気が付いていないでしょう。聡い人だから。

「ここを、サージェスを出ようと思う。」

そう言つと、

「はい。」

につこりと、解ってますよって顔で返事をされた。

この人は爺様みたいだ、といつも感じていた。実年齢からいくと、父親の方が近いんだろうけど（どうかな？こって1年1520日あるからな。それで計算すると、私はまだ13歳だよ。）無条件に甘えなくなるってゆーか、解ってますよ感がある割に、それが嫌味でなく前面に出されないさり気なさか、“大人の人”って感じなんだよね。

「私どものどれかの国にお越しですか？」

さつきから人をガン見していた彼が言う。

金茶の髪に細面の茶の瞳。そうか、実家が山岳地帯だからアークの加護付きか。

「そのつもり、ってゆーか、全部を回ろうと思ってる。」

その言葉に部屋の中がざわめいた。自分たちの国にまで来てくれると。さつきまで話していた議題はまさにそれだったのだから。

「中にはパウロが独り占めしてるなどと、不穏な言葉もあったようだが・・・なあ？ ザクトの。」

と冷たい空気を纏わせて零様はランバードの向かい側に座っているザクト国神官長コスタモールを見た。

「そ・・・すみません。」

”そんなことは・・・”と言いかけたのだろうが、彼は頭を下げた。

「イライラしている原因は解っているが・・・気になるくらいなら今回は代理を送ればよかったろう？来る馬車の中でもずっと愚痴ってたな。流石にお前たち一人一人の都合に合わせてこちらは動けないし、動く気もないからな・・・コスタ。」

ビクツと彼の肩が揺れる。

「生まれたぞ。無事だ。奥方も大丈夫だぞ。つい先ほどだ。……ああよく泣いてるな、元気な……。」

「女ですか？女の子ですよ？」

零様の言葉を奪うようにして身を乗り出し、唾を飛ばす勢いでコスタモールは聞いた。そうか……。だから最初からイライラしていたわけか。

「……。」

そんなコスタモールを見ながらにやにやして零様は、肩を竦めて教えなあいと言っている。

「零様！」

「おっ！……母親譲りの金の髪に金の瞳。真っ白な肌の、そう……待望の女の子だよ。」

やった！と飛び上がる勢いで席を立ったコスタモールに零様が口を開く。

「コスタ。お前、すぐ帰れ。」

「……。は？」

部屋がシン・とした。それは怒っていつている訳でないのは、声の調子で解る。表情はあまり変わらない方の様だから、知らず声で判断してしまう。コスタモールは、零様を振り返って泣きそうな顔をする。

「ご不興を？」

「違うわ。どんな暴君だ、私は……。オーズが下りる。私が送ろう。その方が早い。パウ口席を外す。皆庭にいてくれ、すぐ戻るから、私の旅の連れを紹介しておく。」

言っただけのことだった。零様はコスタモールの襟首をガシツと掴んだかと思うと

【転移・目的地ザクト神殿】

消えた。

もう誰一人声を出すことは出来なかった。

この世界には魔法がある。しかしそれでも転移は魔法陣を使って行われるものであって、一言で転移を、それもほかの人間を連れてとというのは初めて見た。

（でたらめだ。）

指示されたように中庭に出るとすぐだった。目の前の空間が光ったと思ったら、零様が立っていた。

あっさり帰って来た零様は手ぶら……いやお一人だった。皆がコストモールを探すような素振りを見ると、「置いてきた。あれは今日は使い物にならん。」と微笑んでいらっしやった。

「先ほどの言葉は……。もしや。」

「ん？ ああ、生まれた子はオーズの加護付きになる。嬉々としてオーズが下つて来ていた。オーズ好みの美しい赤子だったよ。綺麗な瞳をしていた。」

御子様、そのような言い方は……。まるで主が。

うるさいな、マルスは。事実だろう？ お前だってあまりに速さに呆れていたくせに。

ですが……。

いいじゃないか。あれはフラウの花の精を付けることになったぞ。気にかけてやれ。

……。御意。

風の精霊と話しているのは解った。言葉は理解できないが。精霊語は、どんなに修業をしようが勉強をしようが、人間には聞きとることは出来ないし覚えられない。

【魂・魄】

現れたモノに、皆は後ずさった。更には ま……。魔獣。 と言って

しまい、黒い方に不興を買った。

「魂と魄だ。魔獣ではないよ、どっちかってゆーと神獣だから。彼等と共に行く。どこからどのルートでは教えない。それにこの格好でも行かないから。」

そう言う顔を一撫で。瞳の色と髪の色が変わる。

「それに一番に神殿に顔を出すとも約束はしない。私は街を人を見 てみたいからね。」

この国の王が会いたいと打診してきた時、「なら来れば？」と言った話はランバードから聞いた。

「ただ、貴方たちには言っておこうと思って。父から“守るに相応しくないと判断したら壊していい”と言われていることをね。」
静かに言われた言葉に、最初は理解が出来ず、そして理解した後は驚愕した。

“壊す”

零様はふつと笑って静かに佇んでいる。私たちの反応を見ているようだった。

「そ、んな・・・何故？ 何故ですか？」

ミグリンの呟きに、

「そんなに驚くことか？ 何も全てを滅ぼすとは言っていないぞ。ただ、一部の人間が得をし苦しめられている人間がいた場合、そしてそれが理不尽であったなら、私は迷わず力を振るうと言っているだけだ。その一部の者たちだけが消えることになる。それで何か、困ることでもあるのか？」

零様はミグリンへと視線を投げながら、言っていることは全員へだ。

「それ・・・がもし王族でも、ですか？」

「当たり前だろう？ そんな事が躊躇する材料にでもなると思っているのか？ 何の為に神殿は中立でどこにも属さない作りになっていると思ってる、ソレイク。何故見て見ぬ振りをし、耐えねばならん。そなたたちの力が小さいからというのなら、なぜ精霊王たちや父を呼ばん。心からの助けの言葉なら届くの。そうパウロは教え

たろう？得をし、悪事を働く者たちの声にかき消されてはならない。許してはならない。“真実の扉が開く時、人は平等に裁かれん。”お前たちが毎日の祈りをする時に最後に唱える言葉は飾りではないのだぞ。」

事実、決まり事のように祈りをし、その言葉の意味を神官になった当初ほど考えたことは最近はなかった。それが真実だと零様はおっしゃった。

だったら、日々愚痴を言っていた自分の悩み事も恨み事も？全部届いていると？

そう考えていたら、こちらを見てにやりと笑われた。

（まさか・・・ほんとうに・・・？）

「内容を嗤っているのではないぞ、ソレイク。百面相をしているそなたの顔が面白いから笑っているだけだ。もちろん、内容を知っているがな。」

またにやりと含み笑いをする。

「ひどい！」

「聞こえるのだから仕方ないだろう？加護付きのそなたたちは他の民より私たちに近い。その分聞こえる。職業病だと思って諦めるんだな。それに今更だろう？・・・今までだって散々付いている精霊を通して育ってきた過程の全てを見られているんだから。」

あんな事もこんな事も、振られた事も恥をかいだ事も・・・落ち込んできた。

「まあ・・・そういうことだ。とにかく私は世界を回る。何かあったら何かするかも？だから、心の準備と覚悟をして待ってて・・・ってことだ。」

疑問符付きなのがいかにもで、怖かった。

14 「準備と覚悟をして待ってて?」 (後書き)

・・・ってことでやっと旅立ちます。けど、その前にあと一つ。
そっあの甘えん坊の始末です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9915x/>

彼方の地から

2011年11月18日10時22分発行